

令和7年度 考古学フェア あいちの考古学 2025

資料集 WEB 版

考古学セミナー 11月5日(水)~11月24(月・休)

東海地域の考古学・埋蔵文化財調査 最新成果の公開！

★ポスター展示

会場 金山南ビル11階 名古屋都市センター まちづくり広場
展示期間 令和7年11月5日(水)~11月24日(月・休)
開館時間 火~金 午前10時~午後6時 ※月曜日(10日・17日)は休館
土・日・祝 午前10時~午後5時
入場無料・予約不要

★調査・研究発表会 11月15日(土)・16日(日)

会場 金山南ビル11階 名古屋都市センター ホール
開催期日 令和7年11月15日(土)・16日(日)
開催時間 午後1時~午後4時(両日とも)
定員 100名(先着順) 入場無料・予約不要
※ポスター出展者による解説もあります。

お問合せ先



公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

Tel. 0567-67-4163 Fax. 0567-67-3054

<http://www.maibun.com/>



資料集目次

A01「浜松市 万斛遺跡 8 次発掘調査 報告」 白樫 淳・和気清章（株式会社アコード）・川西啓喜（浜松市教育委員会）-----	3p
A02「花粉から見る国史跡大高城の人為植生と花粉の放射性炭素年代測定」 森 将志（株式会社パレオ・ラボ）・山田圭太郎（山形大学）・大森貴之（東京大学）-----	5p
A03「尾張地域出土の近江湖南系土器について」 高本涼平（名古屋大学大学院人文学研究科）-----	7p
A04「弥生ムラづくりプロジェクト（YMP）活動報告 2025 土器作りと焼成」 松本 彩・増田知佳・宇井雅俊・原田 幹（あいち朝日遺跡ミュージアム）-----	9p
A05「伝法寺廃寺出土軒丸瓦Ⅱ型式とⅢ型式に残る筈の痕跡」 伊藤佑真（名古屋大学大学院人文学研究科）-----	11p
A07「細石刃核の形態変化：岐阜県海老山遺跡と北野遺跡のケーススタディ」 村井咲月（南山大学大学院）-----	13p
A08「久留倍官衙遺跡と四日市市の墨書土器」 大原涼子・田中城久（四日市市シティプロモーション部文化課）-----	15p
A09「犬山市・赤坂 2 号窯出土の灰釉陶器・山茶碗について」 兼松泰弘（愛知学院大学）-----	17p
A10「花の木 2 号墳と 7 号墳（豊川市花の木古墳群）の墳丘構築過程」 早野浩二（愛知県埋蔵文化財センター）-----	19p
A11「名古屋城石垣石丁場跡の調査－蒲郡市竹島石丁場跡・西浦半島海岸部の石丁場跡・医王神古墳石室の石材－」 松田 繁（蒲郡市博物館）・大村 陸（名古屋城調査研究センター）-----	21p
A12「明治用水旧頭首工の調査速報 ー水中構造物の記録保存ー」 山内良祐（愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室）-----	23p
A13「愛知県稲沢市長野北浦遺跡出土の市女笠」 蔭山誠一（愛知県埋蔵文化財センター）-----	25p
A14「史跡 伊勢国分寺跡歴史公園へ遊びに行こう！」 吉田真由美（鈴鹿市考古博物館）-----	27p
B01「下呂石原産地・湯ヶ峰の発掘調査－湯ヶ峰山頂遺跡と湯の平遺跡－」 上峯篤史・南山大学湯ヶ峰遺跡群発掘調査団（南山大学）-----	29p
B02「西尾市佐久島エバス塚古墳の発掘調査」 鈴木理絵（西尾市教育委員会文化財課）-----	31p
B03「2025 年度関ヶ原町不破関跡の発掘調査」 伊藤佑真・高本涼平（名古屋大学大学院人文学研究科）-----	33p
B04「名古屋城石垣石丁場跡の調査－西尾市前島石丁場跡－」 大村 陸（名古屋城調査研究センター）・井口喜景（西尾市教育委員会文化財課）-----	35p
B06「明治時代における犬山焼窯元・尾関作十郎の活動」 井上あゆこ・青木 修・佐久間真子・宮川菜々子・中野耕司・鈴木智恵・坂口さとみ （犬山焼ミュージアム）-----	37p
B07「矢作川沖積地の弥生時代遺跡－矢作川河床遺跡採集資料を手がかりに－」 安達友隆（南山大学大学院）-----	39p
B08「岐阜県揖斐郡大野町野古墳群・乾屋敷古墳 2025 年度の調査成果」 猪飼 苺・高森一史・原田昌浩（南山大学原田研究室）・竹内勝也（大野町教育委員会）-----	41p

B09「新発見！！見えてきた幸田町青塚古墳の素顔」	
神谷駿介・尾崎祐世・金 宇大（滋賀県立大学）・幸田町教育委員会-----	43p
B10「設楽地域と磐田原台地の白色風化石材」	
神取龍生（東海石器研究会）-----	45p
B11「中世陶器の水上輸送～どれだけの山茶碗や瓦を、船に積むことができるのか？～」	
中川 永（豊橋市美術博物館）-----	47p

浜松市 令和6年度 万斛遺跡8次発掘調査 報告

白樫 淳・和氣 清章(株式会社アコード)・川西 啓喜(浜松市)

調査の概要

万斛遺跡は、静岡県浜松市に所在する天竜川が形成した微高地上に位置する遺跡です。今回の発掘調査は、道路改良工事に先立ち実施し、北側調査区をA区、南側調査区をB区の2工区を対象に行いました。

A区の調査概要

発掘調査の結果、13世紀代を中心とした遺構・遺物が確認されました。また、調査区内は、地形の起伏が激しく、調査区の南側は緩やかに現状道路面下部に向かって傾斜しており、その傾斜部には土層堆積状況から、河川氾濫の影響を受けたとみられる層位が確認されました。堆積土内には、13世紀後半とみられる山茶碗が出土しており、この頃に埋没したと考えられます。

東側では柱穴状の遺構が複数確認され、調査区端で掘立柱建物(SHO1)1棟を検出しました。SHO1は、梁行2.8m×桁行2.2m以上を測り、建物は調査区外へと及んでいました。

中央部の砂礫層の高まり部分では、西側で炭化材を含む土坑(SK70)や壁際で不正円形の土坑群が確認されました。

SK70は、北側肩部が礫層を切り込むように長楕円形の土坑(長軸0.85m×短軸0.7m)です。床面に炭化材が約3cm程度堆積しており、炭化材中から永楽通宝1枚が出土したことから、15世紀~17世紀初頭頃の墓壇と考えられます。

また、調査区の北西側では近世墓とみられる土坑群が確認されており、戦国時代以降、墓地として土地利用が行われていたことが明らかとなりました。

ポスター
展示
A01



A区全景(西から)



SHO1検出状況(南西から)



SK70炭化物検出状況

B区の調査概要

B区では、13世紀代を中心とした遺物が出土し、遺構は、調査区内で多数の柱穴とみられる小穴が確認されましたが、建物として纏まる遺構は、調査区の西側で南北軸の掘立柱建物が2棟確認されたのみでした。

調査区の西端でやや大型の溝(SD201)を確認しました。溝は南北方向で確認され、調査区南東隅で大きく落ち込み土坑状を呈していました。SD201は、自然地形の谷部と想定され、A区南側の谷地形と合わせて、当該地周辺には細かな自然地形が入り込んでいると考えられます。

SK283は、調査区の中央西側で確認された土坑です。平面形態は東西方向に長い楕円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.38m、深さ0.5mの規模であることを確認しました。

土坑内からは13世紀代の山茶碗に加えて、鉄製品などが出土しました。



SD201(南東から)



B区全景(西から)



SD201 南西部(南西から)



SK283遺物出土状況(西から)

株式会社 アコード

URL: <https://a-accord.co.jp/>

TEL:06-6445-0557 FAX:06-6445-0693

花粉から見る国史跡大高城跡の人為植生と 花粉の放射性炭素年代測定

森 将志（株式会社パレオ・ラボ）・山田圭太郎（山形大学）・大森貴之（東京大学総合研究博物館）

名古屋市緑区大高町に所在する大高城跡は中世の城館である。この城は、永禄3年(1560年)の「桶狭間の戦い」の時には、駿河を拠点とした今川義元の勢力下であり、その配下だった松平元康(若かりし徳川家康)が兵糧を運び入れたとされ、「桶狭間の戦い」に関連が深い城跡として知られている。

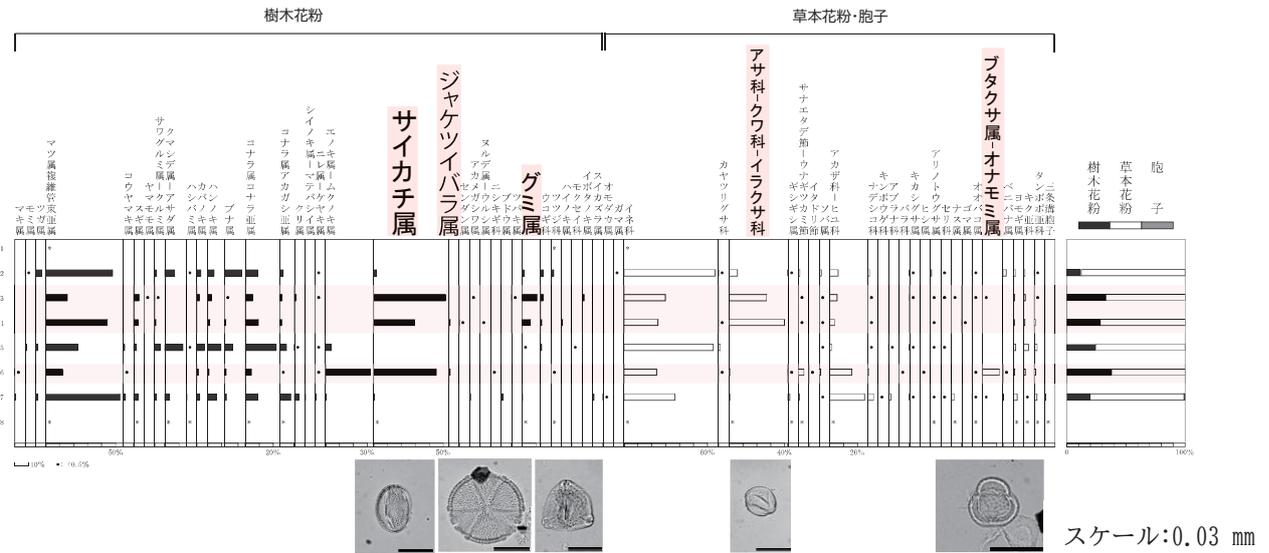
この城跡の堀において花粉分析を行ったところ、サイカチ属が特異的に産出した(図1)。サイカチは戦国時代の小領主クラスの屋敷で植える習慣があり、防御性や有用性に着目して寺院や城へ広がっていったとされている(盛本, 2020)。よって、大高城の堀から産出したサイカチ属花粉は、城の防御林として機能していたサイカチから供給された可能性がある。さらに、サイカチ属花粉が産出する層準では、ジャケツイバラ属やグミ属、アサ科-クワ科-イラクサ科、ブタクサ属-オナモミ属も特異的に産出した(図1)。これらは、棘を持つ植物を含む分類群であり、サイカチ属が産出する層準で特異的に共産している点から考えると、これらの分類群も防御林の一部を構成していた可能性が高い。

大高城が文献に登場するのは16世紀初頭であり、それ以降大高を含む尾張・三河国境周辺地帯は、対立する今川家と織田家勢力に大きく翻弄され、政治的に不安定な状況であった。こうした背景の中、永禄3(1560)年の「桶狭間の戦い」が発生したとされる(名古屋市教育委員会, 2024)。大高城は今川家と織田家の勢力争いの最も直接的な影響を受けた城の一つであり、政治的不安定な状況下で城の防御機能を高めるため、防御林が発達していたと考えられるが、いつから防御林が形成されていたのであろうか。この防御林のより詳細な形成時期を検討するために、Yamada et al. (2021) と Omori et al. (2023) に準拠し(図2)、サイカチ属花粉が特異的に産出する最下部の層準において花粉化石を高純度で抽出し、花粉化石の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、1424~1470AD (95.4%)の年代値を得た。この年代値は、大高城が文献に登場する時期よりも古く(表1)、大高城の築城時期を探る際の手掛かりとなる。

引用文献

盛本昌広 (2020) 軍需物資から見た戦国合戦. 吉川弘文館.

名古屋市教育委員会 (2024) 国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡. 名古屋市教育委員会. Omori, T. Yamada, K. Kitaba, I. Hori, T. Nakagawa, T. (2023) Reliable radiocarbon dating of fossil pollen grains: It is truly possible. *Quaternary Geochronology* 77.



ポスター展示
A02

図1 大高城堀の花粉ダイアグラム

表1 大高城年表

(名古屋市教育委員会(2024)をもとに作成)

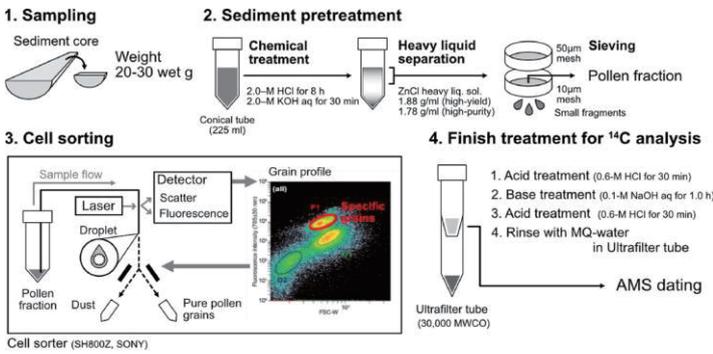


図2 化石花粉の抽出から花粉濃縮物の精製までの全体的なサンプル処理過程 (Omori, et al. 2023)

永正六年九月二十八日	これより先、尾張国大高城主花井備中守、同国氷上社を修造する
(一五〇九)	この日、同社の遷宮が行われる。
天文十七年一月二十六日	今川義元、野々山政兼をして、織田信秀の尾張大高城を攻めしむ
(一五四八)	是日、政兼敗死す。
天文年間	城主は水野氏で、織田信秀の勢力下にあった。
(一五三二)~(一五五五)	
永祿二年八月二十一日	今川義元、朝比奈泰能に、尾張大高在城のための所領を与える。
(一五五九)	
永祿二年十月十九日	今川義元、尾張国大高城に軍勢と兵糧を送る。奥平定勝・菅沼久
(一五五九)	助、戦功をあげ、義元。これを評す。
永祿三年五月十八日	今川義元の命令により、松平元康が兵糧を運び込む。
(一五六〇)	
永祿三年五月十九日	松平元康、丸根砦・鷲津砦を攻撃し、人馬の休息のため大高城に
(一五六〇)	在城する。
	今川義元、桶狭間まで進軍し「桶狭間の戦い」に至る。

尾張地域出土の近江湖南系土器について

名古屋大学人文学研究科 博士前期課程1年 高本涼平

ポスター展示
A03

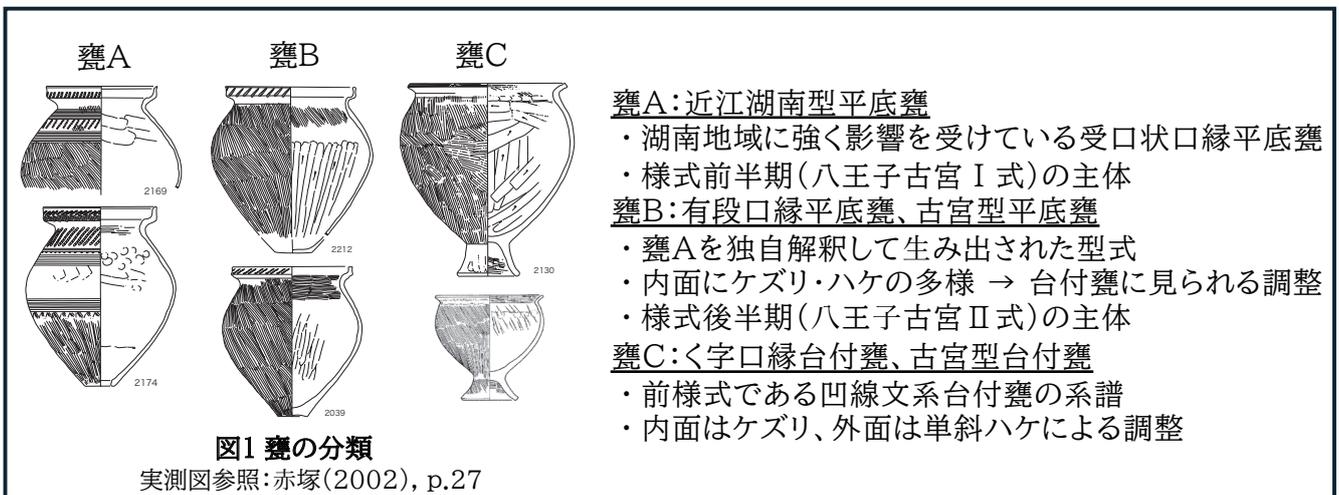
1. はじめに

尾張地域の弥生土器研究においては、弥生時代中期末から後期にかけての移行期を巡って様々な議論が展開されてきた。凹線文を特徴とする中期末の「高蔵式」と、口縁の外反する高杯やパレススタイルを特徴とする後期の「山中式」の間には型式間に大きな断絶が見られるとして、その移行期に「仮称見晴台式」(大参1980)や「八王子古宮式」(赤塚2002)などの様式を認めて文化様相を解釈しようとする動きが見られている。

山中式の成立については西方からの影響が大きいという見解もあり(e.g., 奈良1996)、特に八王子古宮式は近江湖南系の甕形土器によって特徴づけられている。本発表では甕形土器の分析を通して八王子古宮式について検討し、中期/後期移行期の文化様相について考察してみたい。

2. 八王子古宮式について

尾張地域においては一宮市に位置する八王子遺跡出土資料を指標として「八王子古宮式」と呼ばれる土器様式が設定されている。特徴的なのは甕形土器に見られる受口状の口縁であり、近江(特に湖南)地域の土器との関係性が指摘されている(e.g., 矢作・赤塚2003, 赤塚2002)。ここでは赤塚(2002)の編年をもとに、甕形土器の分類視点を整理したい。



以上のように八王子古宮式は近江湖南地域からの影響が強く指摘されているが、土器の胎土分析から搬入先を「野洲川流域」(湖南地域)と「中南伊勢地域」とする見方もある(矢作・赤塚2003)。

3. 朝日遺跡出土資料の分析

濃尾平野南部に位置する東海最大級の弥生集落である朝日遺跡からは、数は少ないものの弥生時代後期初頭段階の近江系甕形土器が出土している(図2)。

前章の視点をもとに行った資料調査では、湖南地域の甕形土器に類似する属性を抽出できた。詳細は以下に示す。



図2 朝日遺跡61D区SDVc区出土の平底甕

実測図参照:『朝日遺跡V』, 1994, p. 100

(紋様帯に関する注釈は筆者による加筆)

写真は筆者撮影(2025/8/13, あいち朝日遺跡ミュージアム所蔵)

ポスター
展示
A03

紋様帯について

- ・口縁端部(①)は左上がり、胴部上半(②)は右上がりの刺突紋
- ・胴部中位(③)に波状紋 → 湖南系の特徴(近藤 2001)

胎土について

- ・薄めの赤褐色を呈し、若干大きめの砂粒を含む
- 在地で製作されたものではなく、搬入されたもの?

4. まとめと考察

弥生時代後期の尾張地域では他地域の文化を包摂しながらも、独自の文化を成立させる。今回はその一例として後期初頭段階の近江系土器を取り上げた。

先にも確認したように八王子古宮式は一宮市八王子遺跡の出土資料をもとに設定された土器様式であり、現在では後期前葉の指標として扱われている。しかしながら、当該期の濃尾平野南部や台地上では受口状の口縁を呈する近江湖南系の資料は乏しく、八王子遺跡のように近江系の土器群を積極的に受容しているとは言い難いため、土器様式としての八王子古宮式は尾張全域というよりはむしろ「小地域的な様式」として評価できる。

弥生時代中期末から後期にかけての尾張地域では、地域齊一的な凹線文系土器群から独自の文化様相へと移っていく過渡期として認識されている。現状として、後期の山中式は口縁の外反する独特の高杯やパレススタイルを特徴とする土器様式として認識されているものの、その前段階である八王子古宮式期については、尾張地域内部での土器様相の違いを踏まえると各小地域・集落において独自の文化を模索している段階と言える。「尾張」という旧国名単位ではなく、時空間的な様式の大小を念頭に置いた上で文化の動態を解釈していくべきであり、弥生時代を通して作り・使い続けられている甕形土器の分析はこうした通時的な文化の解釈に少なからず寄与するであろう。

【参考文献】

- 赤塚 次郎, 2002, 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」, 『八王子遺跡 考察編』, 愛知県埋蔵文化財センター, pp. 25-48.
 石黒 立人・宮腰 健司・池本 正明・深澤 芳樹・佐藤 由紀男・永塚 康次・西本 豊弘・森 勇一・永井 宏幸・堀木 真美子・五藤 そのみ (編), 1994, 『朝日遺跡V(土器編 総論編)』, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集, 愛知県埋蔵文化財センター.
 近藤 広, 2001, 「弥生後期における受口状口縁土器の様相近江の地域区分と他地域への影響」, 『近江の考古と歴史: 西田弘先生米寿記念論集』, 真陽社, pp. 91-100.
 奈良 康正, 1996, 「弥生時代後期における伊勢湾沿岸地域の一様相」, 『京都府埋蔵文化財センター』, 京都府埋蔵文化財調査センター, 3: 97-108. 大参 義一, 1980, 「弥生式土器・土器器」, 『館蔵品図録 1』, 名古屋市見晴台考古資料館.
 矢作 健二・赤塚 次郎, 2003, 「八王子古宮式と近江湖南型甕」, 『研究紀要』, 愛知県埋蔵文化財センター, 4: pp. 34-44.

謝辞

本発表に関わる調査について、あいち朝日遺跡ミュージアム館長の原田幹氏、同僚の松本彩氏には多大なご助力を賜った。記して御礼を申し上げます。また本稿の作成にあたっては、指導教員である名古屋大学人文学研究科考古学研究室の中川朋美准教授にご指導・ご鞭撻を賜った。ここに深謝の意を表す。

弥生ムラづくりプロジェクト (YMP) 活動報告2025 土器作りと焼成

松本彩・増田知佳・宇井雅俊・原田幹 (あいち朝日遺跡ミュージアム)

ポスター展示
A04

弥生時代の技術を再現

あいち朝日遺跡ミュージアムでは田植えから収穫、そして土器炊飯まで、弥生時代の稲作を通じた弥生人の営みを1年かけて体験・学習するイベント「弥生ムラづくりプロジェクト(YMP)」を行っている。今回は、YMPの活動から、土器作りとその焼成について、これまでの取り組みを報告する。

「大人のための土器づくり」講座

土器作り講座は、一般参加者を募集して行う講座「大人のための土器づくり」として開催している。約10名の参加者を募集し、12月に土器の成形、1月に屋外で焼成を行う。また、一般参加者の他に、当館ボランティアのおもてなしムラ人(体験ムラ人)が中心となり、土器製作用の粘土の調整から焼成を行う際の準備や道具の配置まで、様々な面で講座をサポートしている。

粘土の調整と土器の製作

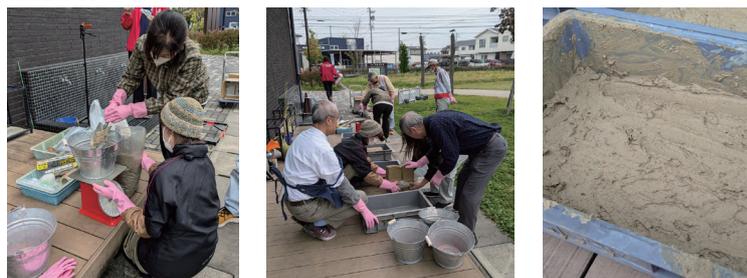
土器作りには、市販されている野焼き用粘土を用いているが、これをそのまま屋外で焼成するとかなりの確率で破損してしまう。本館では、混和剤として川砂を約2～3割加えた粘土を使っている。粘土に砂を加える作業はかなりの重労働だが、これも体験ムラ人の協力を得て行っている。

土器の成形は一般の参加者、ムラ人それぞれが行う。器種は比較的作りやすい甕あるいは壺が多い。粘土紐を積み上げ形を作り、ヘラや貝殻を用いて調整、施文を行う。製作した土器は、屋内で約一ヶ月かけてしっかりと乾燥させる。

土器作りのスケジュール

月	行事
11月	粘土作り
12月	土器作り(成形)・乾燥
1月	土器焼き
2・3月	土器炊飯

粘土を作る



素材となる粘土は、市販の野焼き用粘土に川砂を混ぜて作る。ミュージアムでは、粘土10kgに対して2～3kgを目安にしている。砂と水を加えなるべく均質に混ぜるようにしっかりと練り込む。



混ぜた粘土がある程度の硬さになったらブロック状に形を整える。



砂が少なかった年、焼成時にほとんどが破裂し焼成は失敗に終わったこともある。

土器作り



成形甕を作っている様子。



施文壺を作っている様子。最後に櫛状具で施文。



完成甕に合わせた蓋も製作。



乾燥
完成した土器を棚に並べて乾燥。

土器の焼成(覆い焼き)

当館の土器の焼成は、主に稲藁を燃料とする覆い焼きによって行っている。まず地面に薪を敷きその上に乾燥させた土器を積み上げる。その上から稲藁(体験水田で刈り取ったもの)を被せるが、稲藁だけではうまく温度が上がらず表面が黒ずんだ土器に焼き上がってしまう。最近では、稲藁の前に敷地内で拾い集めた小枝などをかけるようにしている。こうして焼成された土器は、褐色の胎土で、輪郭が明瞭な黒斑が形成される。また、覆い焼きによる土器焼成時に、どのように窯内の温度が推移しているのかといったデータも収集している。

土器の活用

無事に焼き上がった土器は、参加者がそれぞれ記念に持ち帰ることになる。また、ミュージアムの体験学習用の教材としても活用している。炊飯体験(体験水田で収穫した米や雑穀)用の鍋として、復元住居などの生活空間を演出する展示品として、また、イベント時に開催される発掘体験で掘り出す土器として、様々な場面で活躍している。

ムラ人の募集

あいち朝日遺跡ミュージアムのボランティアとして活動する「おもてなしムラ人」は 毎年春に募集しています。興味がある方はぜひ日頃からミュージアム公式WEBサイトなどチェックしてください。

施設情報



あいち朝日遺跡ミュージアム
住所 愛知県清須市朝日貝塚1番地
電話 052-409-1467
休館日 月曜(祝休日の場合は翌平日)、12/28~1/3
交通 城北線・尾張星の宮駅より徒歩約9分、名鉄・新清洲駅より徒歩約22分、名古屋第二環状自動車道 清洲東ICから約1分、名古屋高速道路 清須出口から1分
駐車場 普通車 / 15台 大型バス / 3台

覆い焼きの手順



薪を敷き、その上に土器を積み上げる。



枯れ枝を被せ、土器の隙間にも詰める。



藁で覆い、上から泥を被せる。



藁に火を付ける。



焼き上がった土器

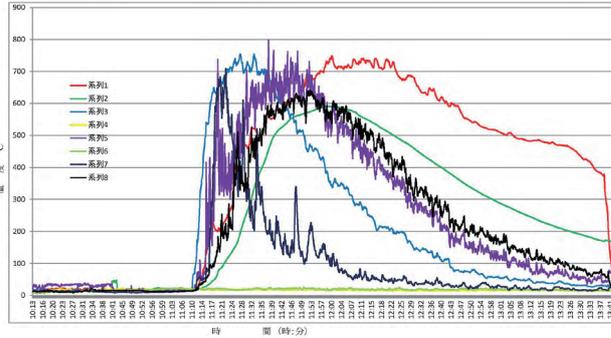


灰の中から慎重に土器を取り出す。

土器焼き 温度測定結果

2025年2月11日

測定場所	1	2	3	4	5	6	7	8
最大温度(°C)	749	591	755	32	708	25	709	641
最小温度(°C)	8	14	13	10	12	6	8	8



ムラ人の協力で覆い焼きの温度を測定した。着火後すぐに温度が上がり、10分ほどで最高温度に達した後、徐々に温度を下けている。最高温度はおよそ800°C弱。窯の中央部では、ピークが少し遅れ、温度の上がり方も緩やかになっている。

土器の活用事例



お米の炊飯体験



復元住居での参考展示



季節イベントの発掘体験



土器焼成動画



土器炊飯動画

※QRコードを読み込むと、YouTubeに移動します。

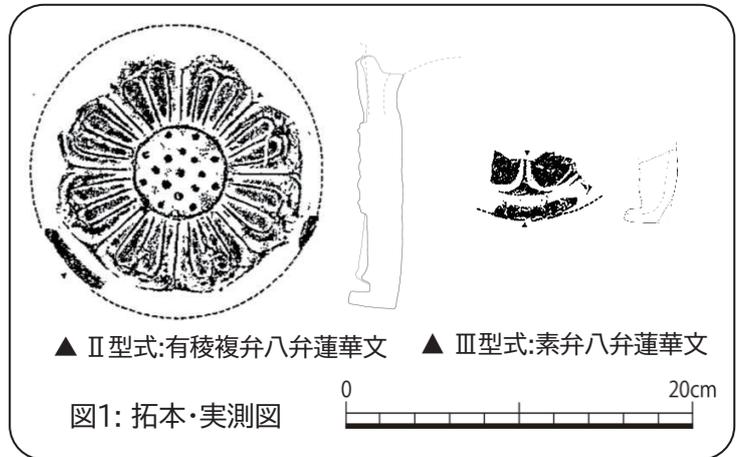
伝法寺廃寺出土軒丸瓦Ⅱ型式とⅢ型式に残る範の痕跡

名古屋大学大学院 人文学研究科 博士前期課程1年 伊藤佑真
ito.yuma.f1@s.mail.nagoya-u.ac.jp

1.はじめに

伝法寺廃寺は一宮市に所在した古代寺院である。発掘では多量の瓦が出土し、報告書によると、軒丸瓦はⅠ～Ⅲ型式に分類される(土本2006)。

本報告では、その内のⅡ型式(有稜複弁八弁蓮華文)と、Ⅲ型式(素弁八弁蓮華文)(図1)について見ていく。



2.瓦に残された範の痕跡

軒丸瓦の文様は型＝範によって表出されるが、文様以外の範に刻まれた痕跡も表出される。そのため、その痕跡を捉えることは最も重要な分析行程の一つと言える。

<Ⅱ型式に残された痕跡>

軒丸瓦Ⅱ型式には、文様の割り付け痕と推定される小突起(図2・3)の存在が指摘されている(土本2006)。この小突起は、出土・採集された軒丸瓦Ⅱ型式9点(+接合丸瓦5点)の内、3点で確認できる。ここで小突起について詳しく述べると、文様の外縁内側底部に位置し、直径は約0.2cmで、高さは約0.1～0.2cm程である。そして各個体との位置関係から小突起は少なくとも3つあることが確認でき、左から1.9cm、2.1cmの間隔(各小突起の中心間の直線距離)で配置される(図2)。ただ、小突起は文様の一部ではなく、用途は不明(上記指摘の文様割り付け痕の可能性もあるが)である。ここでは少なくとも文様を表出するための型＝範に見られる痕跡とするに留めておく。

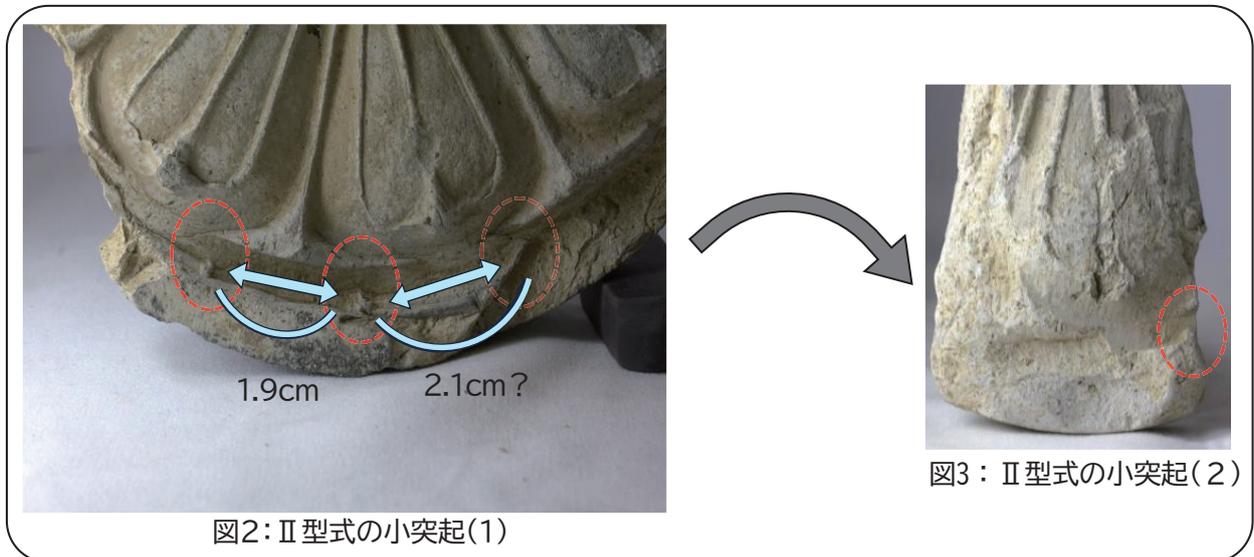


図2: Ⅱ型式の小突起(1)

図3: Ⅱ型式の小突起(2)

<Ⅲ型式に残された痕跡>

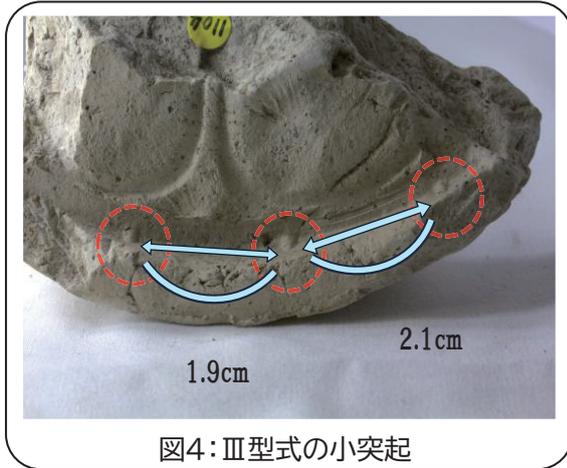


図4:Ⅲ型式の小突起

先の小突起を念頭に、異なる文様を持つ軒丸瓦Ⅲ型式をしてみる。すると、**同位置・同形状の小突起を観察することができる**(図4)。だが、Ⅲ型式は4点出土と少なく、詳細な検討の障壁となる。しかし、文様を持つ軒丸瓦が存在する背景には、文様を表出する型＝**範**の存在がある。そのため、文様・**範**の検討ではいくらか扱いに注意を要するも、少量でも検討に足る。そこで、Ⅲ型式で残存する間弁の幅を、その盛り上がりの基底部分で計測した。すると、数値は**2.4cm**

であった。Ⅱ型式でも同様に見ると、**2.4cm**と数値が一致した。従って、Ⅱ型式とⅢ型式では文様の起伏の度合いは異なるも、輪郭となる文様の基底部分は同じである。よって、小突起・文様から両者は**同一の型＝同範関係にある**と言える。

3.おわりに

以上から、**軒丸瓦Ⅱ型式とⅢ型式は同じ範によって製作された瓦**と言える。そして文様の違いは、**改範が行なわれた結果**と解釈できる。ここで先後関係を述べると、「文様が盛り上がる＝**範**への掘り込みが深い」ことから、文様の盛り上がりが高いⅢ型式→文様の盛り上がりが高いⅡ型式への変遷が想定できる(図5)。実際、Ⅱ型式においては花卉に稜線が加えられていることから、先の変遷過程は肯首される。そのため、Ⅱ型式・Ⅲ型式の分類標記は、**Ⅲ型式→“Ⅱa型式”**、**Ⅱ型式→“Ⅱb型式”**の方がより実状に即していると言える。

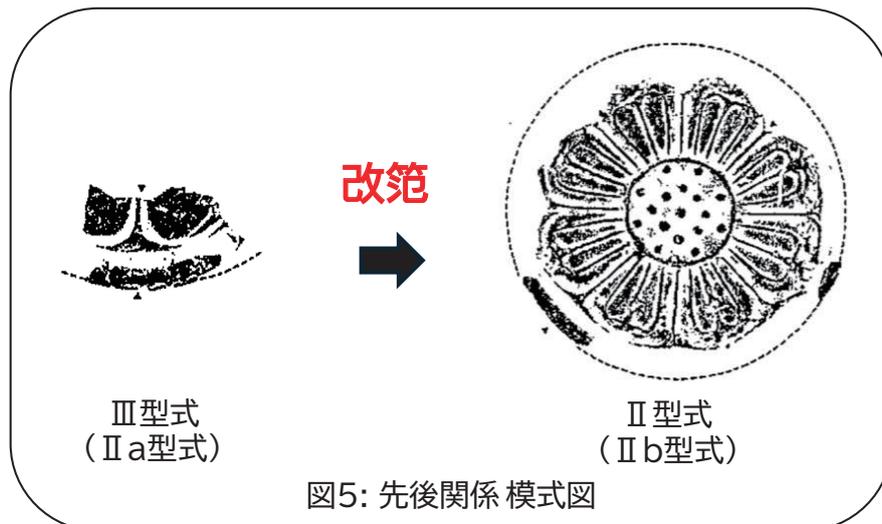


図5: 先後関係 模式図

謝意

本検討を行なうにあたって、瀧はる香氏はじめ一宮市博物館の皆様にご多大なるご助力を賜りました。未筆ながら記して感謝申し上げます。

<図版> 1・5: 拓本は土本2006より、実測図は筆者作成、2~4: 筆者撮影・作成

<参考文献> 土本典生2006『伝法寺廃寺発掘調査報告書』一宮市教育委員会

細石刃核の形態変化： 岐阜県海老山遺跡と北野遺跡のケーススタディ

村井 咲月（南山大学大学院）

研究の背景と目的

後期旧石器時代末、東アジアで登場した細石刃の研究は、これまで主にシベリアや東北日本における、削片系細石刃石器群を対象として進展してきた（青木ほか 2023等）。対する西南日本では、稜柱形を呈する野岳・休場型細石刃核や、舟底形を呈する船野型細石刃核などに代表される、非削片系細石刃石器群が広く分布している。非削片系細石刃核は、二種類に大別できるという見解は、ほとんどの研究者間で共通している。しかし、さらなる細石刃核型式の細分については、研究者間での意見の違いがあり、今後解決すべき課題である（芝 2011等）。東アジアにおける細石刃文化を包括的に理解するためには、削片系細石刃石器群に限らず、非削片系細石刃石器群に関する研究の深化が不可欠である。

非削片系細石刃石器群は中国東北部に起源をもち、九州地方北部を通じて、中部高地や関東地方南部まで拡散した。東海地方西部では、いずれの側面から見ても円錐形をなす「海老山型細石刃核」の存在が指摘されている（鈴木 1979）。ここで海老山型細石刃核は、船野型細石刃核と関係すると定義された。しかし以降、批判的な検討はされてこなかった。

その理由は、本地域の細石刃核の出土例が乏しいためであった（堤 2011）。近年、資料報告が増加したことで（長屋 2010、藤村ほか 2017、川合 2022、2024 等）、資料不足は改善しつつあり、本地域の細石刃文化を改めて描写する機運が高まっている。本研究ではその一環として、海老山型細石刃核の由来が、先行研究どおり船野型細石刃核なのか、あるいは野岳・休場型細石刃核なのかを検討する。

研究の対象と方法

本地域で、多量の細石刃核が確認できる遺跡は限られている。本研究では、岐阜県・海老山遺跡および北野遺跡の2遺跡で獲得された細石刃核、合計115点を対象とした。

細石刃核の形態変化を論じるため、属性分析を実施

した。まずはじめに、細石刃核全点に対し、細石刃剥離の進行具合に基づいて、段階を設定した（図1）。

細石刃核の打面の最長部分を打面長、それに直交する最長部分を打面幅、打面に直交する最長部分を高さとして定め、ノギスで長さを計測した。各部の長さで減少度合から、細石刃核において、細石刃核剥離がどのように進行するかを、定量化して示した。この結果から、海老山型細石刃核が野岳・休場型細石刃核と、船野型細石刃核のいずれに起源をもつかを検討した（図2）。

結果

海老山遺跡の細石刃核は、高さおよび打面長の減少が顕著である（図3）。本遺跡の細石刃核の主体は船野型細石刃核であることが示される。段階3、4の一部の細石刃核で打面調整の実施が確認できる。平坦な打面を維持する船野型細石刃核に、打面調整を取り入れる、細石刃剥離工程上の工夫がみられる。

北野遺跡の細石刃核は、高さ、打面長、打面幅が総じて減少していく（図4）。本遺跡の細石刃核の主体は野岳・休場型細石刃核であり、打面調整と細石刃剥離が同時に実施された結果、段階4の海老山型細石刃核につながる。

議論

従来、海老山型細石刃核は、東海地方西部に特有の細石刃核として知られ、単一の剥離面打面を特徴的に有することから、その由来は、船野型細石刃核だと考えられてきた（鈴木 1979）。本研究の計測結果は、海老山型細石刃核が船野型細石刃核、および野岳・休場型細石刃核の双方から派生する可能性を示している。とりわけ、海老山遺跡の計測結果は、船野型細石刃核で、細石刃剥離の終盤にて、打面調整が取り入れられる様子がうかがえた。すなわち、海老山型細石刃核は独立した細石刃核型式ではなく、船野型細石刃核と野岳・休場型細石刃核において、細石刃剥離が極度に進んだ結果、生じる細石刃核の形状とみなせる。

引用文献

青木要祐・佐々木繁喜・傍島健太 2023「本州における白滝型細石刃石器群の石材獲得・消費戦略」『旧石器研究』19, pp.39-58。
 川合 剛 2022「美濃加茂市北野遺跡の細石核関連資料—吉田英敏氏収集資料から—」『美濃加茂市民ミュージアム紀要』21, 美濃加茂市民ミュージアム, pp.16-26。
 川合 剛 2024「加茂郡富加町海老山(恵日山)遺跡の後期旧石器時代・縄文時代草創期の石器—美濃加茂 市民ミュージアム所蔵吉田英敏氏収集資料から—」『美濃加茂市民ミュージアム紀要』23, 美濃加茂市民ミュージアム, pp.1-22

芝 康次郎 2011『九州における細石刃石器群の研究』六一書房。
 鈴木忠司 1979「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』古代学協会, pp.1-34。
 堤 隆 2011『最終氷期における細石刃狩猟民とその適応戦略』雄山閣。
 長屋幸二 2010「東海地方の細石刃石器群」『旧石器考古学』73, 旧石器文化談話会, pp.25-34。
 藤村 俊・齊藤基生 2017「美濃加茂市民ミュージアム所蔵吉田コレクション」『東海石器研究』7, 東海石器研究会, pp.4-11。

ポスター展示
A07

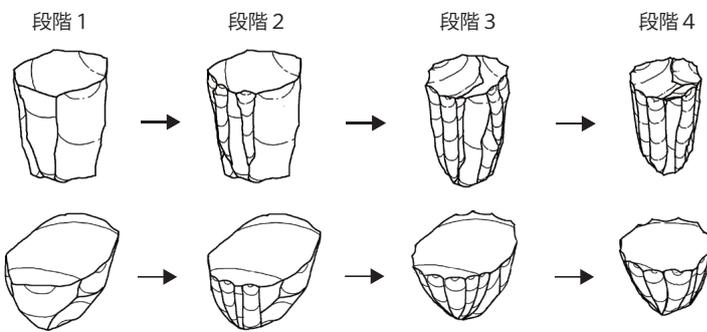


図1 細石刃剥離の進行具合に基づく細石刃核の段階の模式図

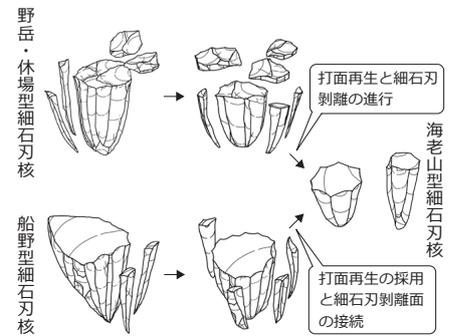


図2 東海地方西部の細石刃剥離技術

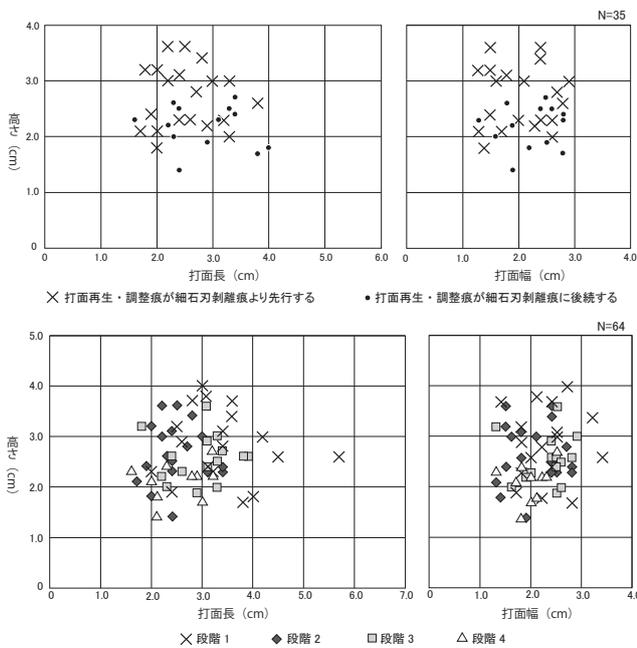


図3 海老山遺跡の細石刃核の属性分析結果

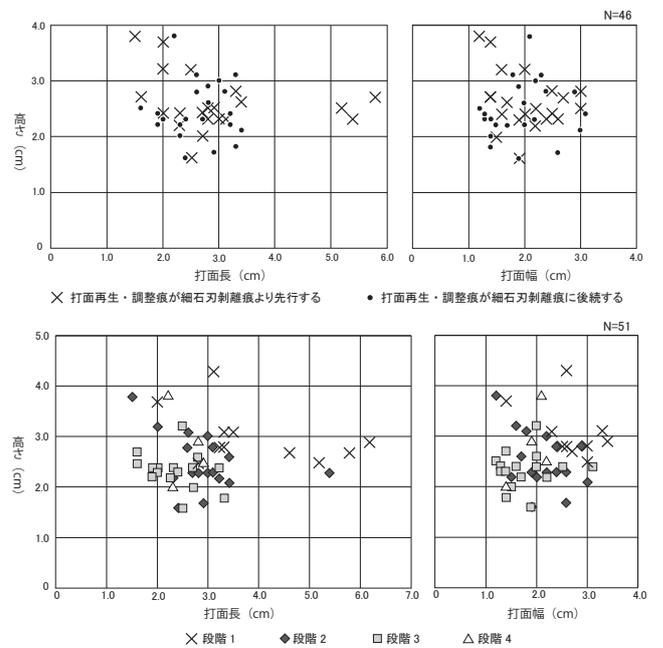


図4 北野遺跡の細石刃核の属性分析結果

くる べかんが いせき よっかいちし ぼくしよどき 久留倍官衙遺跡と四日市市の墨書土器

四日市市シティプロモーション部文化課 大原涼子・田中城久

1. はじめに

久留倍の地に役所があった、飛鳥時代から平安時代にかけてのころ、文字を書くことができたのは、身分の高い貴族や、役所で働く人々、僧侶といった限られた人たちでした。そのため、文字が書かれたものが出土することはとてもめずらしく、その遺跡がどんな場所だったのかを考えるのに重要なものとなります。

奈良時代、国の仕組みが整ってくると、位の高い貴族の役人から下級役人まで、仕事をするために文字を書くことが必要となります。それは、地方の役所でも同様で、文字を書くことは役人として重要な教養でした。久留倍官衙遺跡においても、役人が字を書くための道具である円面硯や墨書土器が出土しています。

2. 国指定史跡 久留倍官衙遺跡

全国的にも珍しい、東向きの古代の役所跡です。現在では、役所の正門である八脚門を復元するなど、公園として整備しています。672年の壬申の乱や、740年の聖武天皇の東国行幸に関わりが指摘されています。



円面硯



「田」



「亥」

墨書土器とは？

土器に筆・墨を使って文字・記号・絵などを書いたもの。特に、食器などを管理するために、使用者の名前や役職、使用場所が書かれたものが多くあります。他にも、神仏へのお祈りや落書き、習書が見つかっています。

3. 四日市市内で出土した墨書土器

○北中寺遺跡

木簡や施設名などが書かれた墨書土器が出土しています。公的な機関があったと考えられますが、「北中寺」の字名から寺院である可能性も考えられます。

「富貴」と書かれている土器は、吉祥句と呼ばれる、まじないとしておめでたい文字を書いたもので、平安時代の集落でよく見られます。



「郡」



「厩」?



「富貴」

○宮の西遺跡

奈良時代から中世にかけての遺物が多く出土し、三重郡柴田郷の中心的集落だったと考えられます。木簡や石帯が出土しています。



「板」

○上野遺跡

弥生時代中期から中世にかけて、断続的に人が生活していた集落跡です。人名である「實平」と書かれた土器が多く見つかっています。



「實平」

く る べ かん が い せき 墨書土器が出土したころの久留倍官衙遺跡

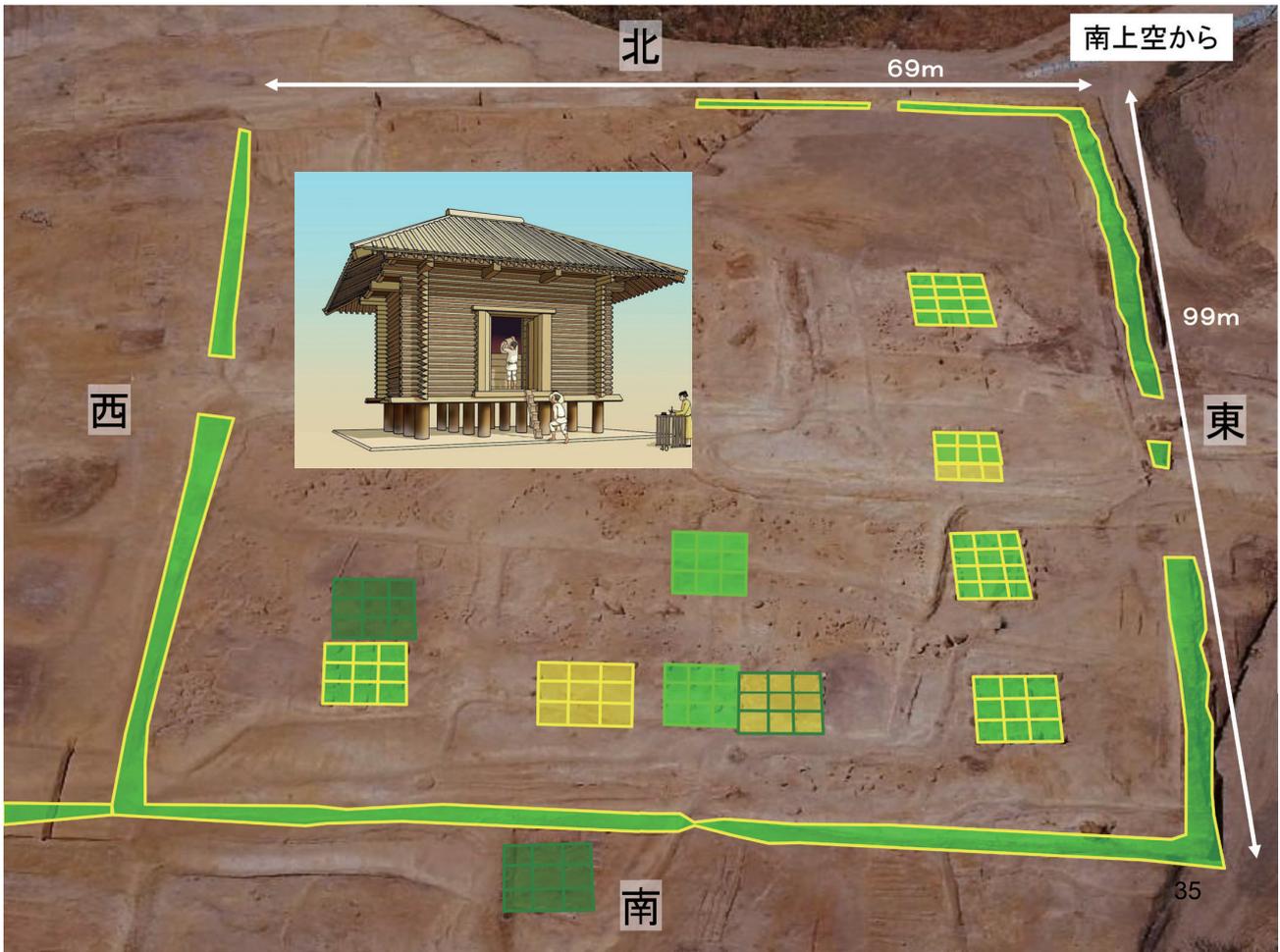
国史跡 久留倍官衙遺跡（三重県四日市市大矢知町）は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡です。古代においては朝明郡衙あさけぐんがと考えられています。

墨書土器かいゆうとうきは灰釉陶器のものが多く出土しており、時期は平安時代にあたります。飛鳥時代終わりから奈良時代にかけて「郡衙政庁」、長大な東西棟の掘立柱建物の時期を経て、平安時代前期は正倉院しょうそういん（倉庫群）が建てられます。律令で定められた「倉庫令そうこりょう」では「倉は、高く乾燥したところに置くこと。周囲には池渠を開くこと」とあり、立地・区画溝・倉りょうは令に決められたとおりの様相を呈しています。



久留倍官衙遺跡位置図

ポスター展示
A08



久留倍官衙遺跡正倉院

犬山市・赤坂2号窯出土の灰釉陶器・山茶碗について

愛知学院大学文学部 歴史学科 加藤研究室 4年 兼松泰弘

はじめに

赤坂2号窯は、愛知県犬山市に所在する平安時代後期～末期の窯跡である。昭和46(1971)年に発掘調査が行われ、「灰釉陶器」と「山茶碗」が出土している。

本稿では、発掘調査時の出土遺物の整理を行い、本窯の性格とその位置付けについて考察してみたい。

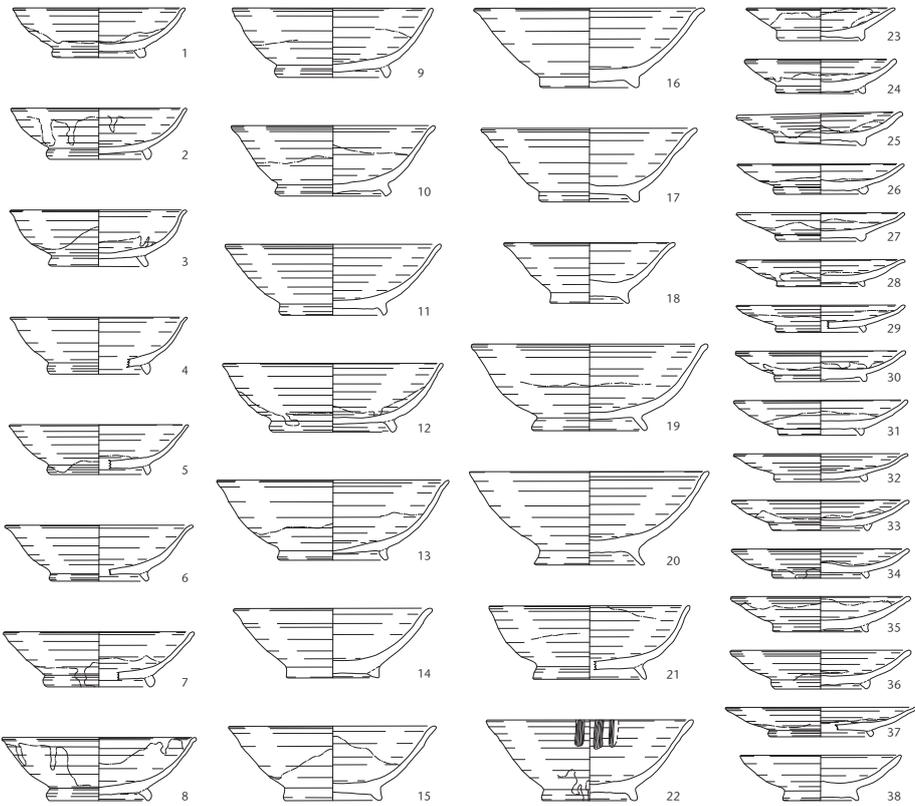
第1章 遺跡の立地

犬山市は愛知県の最北端に位置し、隣接地域には小牧市・春日井市(+犬山市)に分布する「尾北古窯跡群」や^{註1}、可見市・多治見市などに分布する「東濃西部古窯跡群」といった一大窯業生産地が展開している。犬山市域では、約150基の窯跡が確認されている^{註2}。

本窯は羽黒字堂ヶ洞に所在し、標高70mほどの丘陵北側斜面に築造されていたと考えられる。周辺には約10基^{註3}の窯跡からなる「赤坂古窯跡群^{註4}」が存在したようである(現在は滅失^{註5})。

第2章 発掘調査の概要

本窯は昭和46(1971)年に発掘調査が行われており、その概要が『犬山市史』に掲載されている(宮川1983)。資料集ではこの内容は割愛する。



第3章 出土遺物整理報告

出土遺物には椀(1~21)・輪花椀(22)・皿(23~37)・輪花皿(39)・段皿(38,40,41)・耳皿・長頸瓶(42,43)・広口瓶(44,45)・甕(46)があり、施釉の有無・製作技法・高台の特徴などから椀はI類(1~13), II a類(14~17), II b類(18), III類(19~21)に、輪花椀はI a(22), I b類に、段皿はI(40,41), II(38)類に分類した。

第4章 考察

まず、上記で報告した出土遺物を齊藤孝正氏が示した尾北窯編年に当てはめると(齊藤1981a・b, 1989b)、2時期に大別できる。1つは椀I類と皿が主体を占める時期で、「漬けがけ」による施釉・外面底部に回転ヘラ削り or 回転ナデが施され

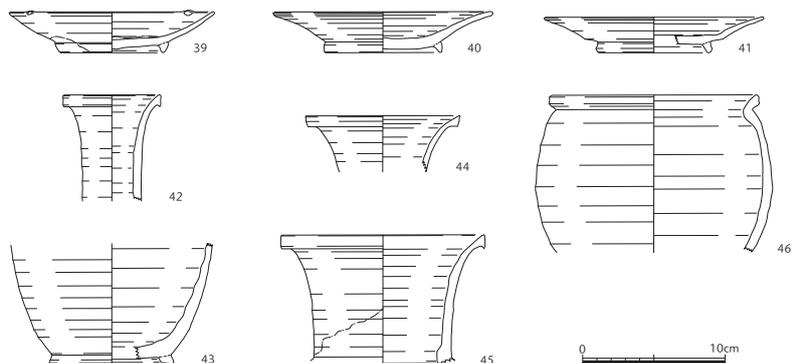


図1 赤坂2号窯出土遺物実測図

る・やや低い三日月状の高台を有する」といった共通点が挙げられる。椀Ⅲ類(19,21)・輪花皿・段皿Ⅰ類も同様の特徴が認められ、篠岡4'号窯式(S-4')期に比定される。これに併行する時期として東濃窯では大原2号窯式期が設定されている(尾野2008, 齊藤1989b, 藤澤1990など)。

そして、もう1時期を構成するのが椀Ⅱ類・Ⅲ類(20)・輪花椀・段皿Ⅱ類である。資料数自体は少ないものの、「漬けかけ施釉と無釉の混在・回転糸切り痕を残すものがみられる・三角高台を有する」といった共通点が挙げられ、篠岡1号窯式(S-1)期に比定される^{註6}。一方、東濃窯に関してはこれに併行する時期の窯式について研究者によって異なる見解が存在する。ただ、当該期の東濃窯に特徴的な器種が本窯の出土遺物には確認できないため、本稿ではひとまず尾北窯の様相に近い窯跡として評価したい。

おわりに

本窯は犬山市内で発掘調査が行われた数少ない窯跡である。犬山市域における灰釉陶器・山茶碗生産の様相を明らかにしていく上で欠かせない遺跡であり、今後も出土遺物の整理を継続していきたい。

【註】

1. 犬山市域の古窯跡群(特に古代の灰釉陶器窯)は現状その位置付けが不鮮明であり、「尾北窯」の一端に含まれる場合と(齊藤1995, 尾野2008, 大塚2020など)、「東濃窯」の一端に含まれる場合がある(杉崎1976, 山内2008, 藤澤2018など)。
2. 埋蔵文化財包蔵地として登録されているのは49基であるが(2025年9月現在)、昨年度末の踏査により約100基の中世の山茶碗窯跡を確認している(兼松2025)。
3. 基数については宮川氏の記述を引用した(宮川1983)。
4. 『犬山市史』等では「堂ヶ洞古窯跡群(堂ヶ洞2号窯)」と明記されているが、同じ窯を指す別称であるため本稿では「赤坂古窯跡群(赤坂2号窯)」で統一した。
5. 近年、赤坂古窯跡群のすぐ東に位置する宮裏池の岸辺から灰釉陶器が採集されており(大塚2020)、場所によっては残存している可能性があるため改めて踏査を行う必要性を感じる。
6. 本稿ではS-1期として1時期と判断したが、当該期の無釉のものを山茶碗第3型式としてさらに細分するかどうかについては今後の検討課題としたい。
7. 山内氏の論文の呼称を引用して「椀C」と明記したが、実際には研究者によって分類の基準やそれに応じた呼称が異なるため、研究者間で「椀C」という共通認識があるわけではない。

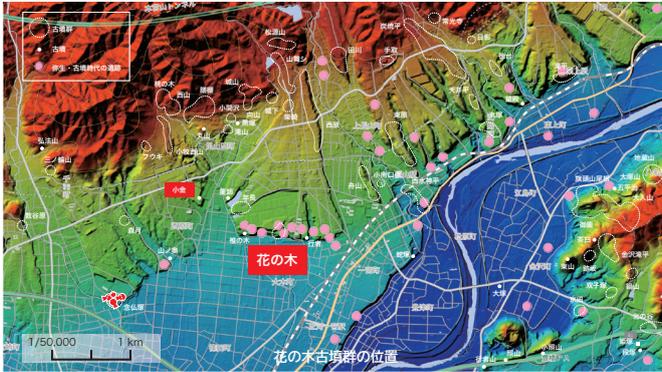
【引用・参考文献】

1. 愛知県立犬山高等学校地歴クラブ 1972『地歴学報』第9号, 愛知県立犬山高等学校地歴クラブ
2. 大塚友恵 2020「犬山市・宮裏池採集の灰釉陶器について」『研究紀要 遷波』第7号, NP0 法人古代遷波の里・文化遺産ネットワーク, pp.21-25
3. 大西遼 2020「地方における白瓷生産拡散の実態と猿投窯 一尾張国知多半島・伊勢国・飛騨国・近江国・山城国の白瓷窯から一」『東海窯業史研究論集Ⅱ』東海窯業史研究会, pp.27-60
4. 尾野善裕 2008「第三章 古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第31集, 豊田市郷土資料館(編), pp.77-92
5. 兼松泰弘 2025「赤色立体地図を活用した山茶碗窯跡の発見 一犬山市八曾地区を事例に一」『研究紀要 遷波』第12号, NP0 法人 古代遷波の里・文化遺産ネットワーク, pp.26-39
6. 県立犬山高等学校地歴部 1962『地歴学報』第8号, 県立犬山高等学校地歴部
7. 齊藤孝正 1981a「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
8. 齊藤孝正 1981b「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ』愛知県建設部・小牧市教育委員会, pp.19-29
9. 齊藤孝正 1989b「灰釉陶器生産の一様相」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報 第3号, 美濃古窯研究会, pp.5-14
10. 齊藤孝正・後藤建一(編) 1995『須恵器集成図録 第3巻 東日本編Ⅰ』雄山閣出版
11. 齊藤孝正 2000「附論 猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」『日本の美術』第409号 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器, 至文堂, pp.87-98
12. 杉崎章 1976「VI 尾北古窯跡群」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』愛知県建設部・小牧市教育委員会, pp.97-106
13. 藤澤良祐 1990「東海地方における窯業生産の転換期について」『土器から見た中世社会の成立』シンポジウム実行委員会, pp.85-105
14. 藤澤良祐 2018「東海地方における中世窯の消長 一中世前半の様相を中心に」『東海窯業史研究論集Ⅰ』東海窯業史研究会, pp.1-34
15. 宮川芳照 1983「五 歴史時代」『犬山市史 史料編三 考古 古代・中世』犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会, pp.182-210
16. 山内伸浩 1994「第6章 結語」『白土原14号窯発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第42号, 多治見市教育委員会, pp.27-35
17. 山内伸浩 2008「東濃地域における灰釉陶器・山茶碗生産の一様相 一窯の分布とその変遷からの視点一」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』

日本考古学協会 2008年度愛知大会実行委員会, pp.533-547

花の木2号墳の墳丘土層断面

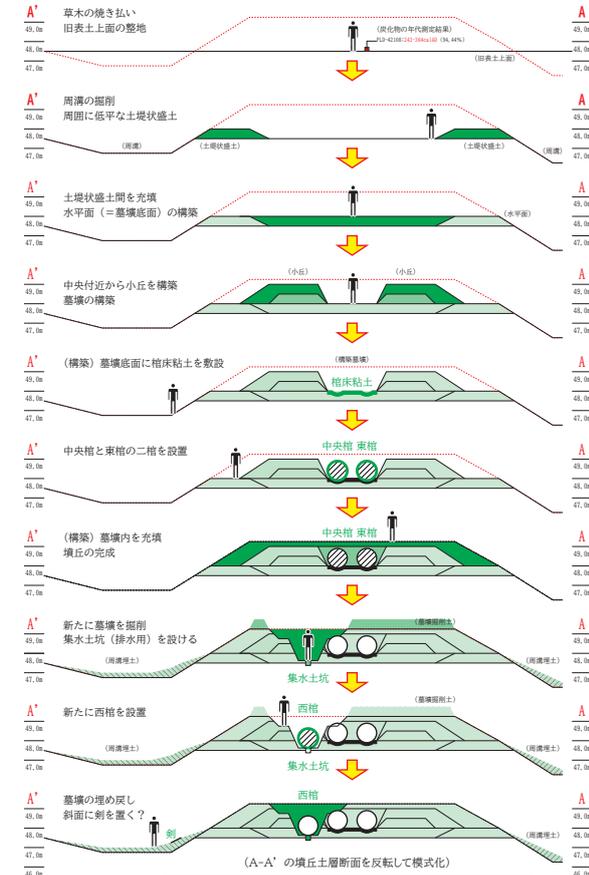
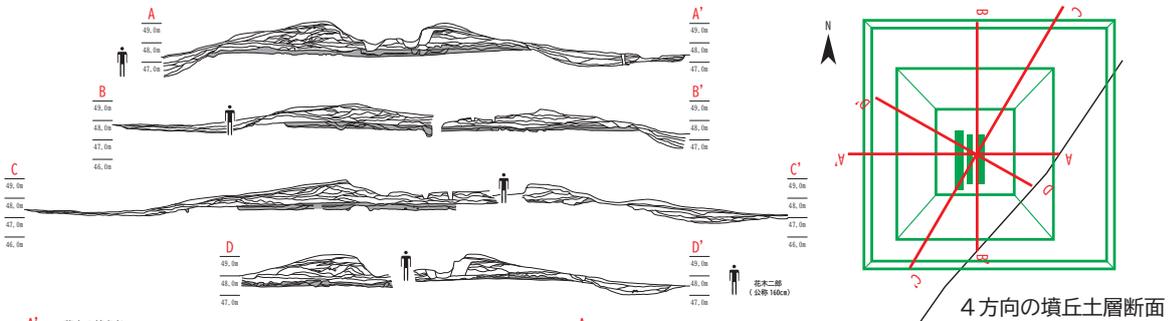
花の木2号墳と7号墳（豊川市花の木古墳群）の墳丘構築過程



早野浩二（愛知県埋蔵文化財センター）



花の木2号墳



花の木2号墳の墳丘構築過程

花の木古墳群はどのような古墳（群）か？

本宮山（標高789m）から派生する扇状地の末端に立地。付近には甲冑を副葬する薬師古墳、豊富な形象埴輪が知られる念仏塚古墳群。山麓には4基から構成される炭焼平古墳群（愛知県指定史跡5基を含む）、城山古墳群・向山古墳群（横石塚古墳）など、多数の群集墳を形成。
 花の木古墳群は前期後半（4世紀前半）から中期前半（5世紀前半）の古墳群。7基の古墳から構成され、2・3・5・6・7号墳は方墳であることが判明。周溝を検出。葺石や埴輪、段の築成はない。周辺に土塚墓や土器棺墓が分布。
 7号墳は東日本最古の蛇行剣を含む豊富な鉄製品を副葬。

花の木2号墳の発掘調査～古墳と埋葬施設の構築過程が分かった！

2号墳は昭和43年（1968）、久永春男氏による緊急調査で3基の木棺を検出。令和2年（2020）の再発掘調査で、墳丘の解体までを含めた調査を実施。古墳の規模は長軸（南北）約23m、短軸（東西）約20m、高さ（最大）約2.5m。古墳の主軸方向と直交する方向、斜行する2方向の4方向で墳丘断面を観察、記録。調査の結果、判明した墳丘構築過程は左に示す通り。
 墳丘の構築と並行して埋葬施設を構築する「構築墓壇」に中央棺と東棺を設置。墳丘の中央に設置、墓壇底面には棺床粘土を敷設（静岡県には比較的多い）。墳丘の完成後に埋葬施設を構築する「掘り込み墓壇」に西棺を設置。南端に排水用の「集水土坑」を設ける（三重県や静岡県に比較的多い）。
 埋葬施設の構築過程との関係を含めて墳丘の構築過程が明らかになった！

同じ工法を採用した小金古墳～地域で古墳の構築技術が受け継がれる！

小金古墳は花の木古墳群が立地する台地の向かい側に立地する直径約35.3mの円墳。二段築成で、斜面に葺石を施す。埴輪はない（築造時期を示す遺物に恵まれない）。墳形、外表施設（葺石）から花の木古墳群が先行し、小金古墳が後出する可能性。墳丘中心付近は損壊するが、その他は墳丘が良好に残存。全面的な発掘調査、墳丘土層断面の詳細な観察により、墳丘の構築過程が判明。前半の工程として、土手状盛土と水平面の構築。後半の工程として、小丘状盛土を施工（墳丘上段の構築）。
 工程、工法が花の木2号墳とほぼ同じ！
 異なった墳形（円墳）と段の築成を採用し、規模が拡大。葺石も施工する一方で、地域（数km圏内）で古墳の構築技術が受け継がれたことが明らかになった！

【参考文献】

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2026 『花の木古墳群 花の木遺跡 花の木北遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第231集

名古屋城石垣石丁場跡の調査

— 蒲郡市竹島石丁場跡・西浦半島海岸部の石丁場跡・医王神古墳石室の石材 —

松田 繁（蒲郡市博物館）・大村 陸（名古屋城調査研究センター）

1 概要

慶長15年(1610)に築かれた名古屋城は、徳川家康の命により西国を中心とした20の大名による公儀普請として行われました。その際、石垣として使われた石材は、濃尾平野の周辺部である南知多町の篠島、西尾市と蒲郡市にまたがる三河湾北岸地域、小牧市の岩崎山、岐阜県海津市を中心とする養老山系などから採取され、中には遠く瀬戸内から運ばれたものもありました。

今回は、三河湾北岸地域のうち、これまでに調査した蒲郡市域に点在する石材の採取地(石丁場)についてご紹介します。



図1 位置図

2 竹島石丁場跡の調査

竹島は、三河湾最北部に位置する面積約19,000㎡、島の周囲680m、島の高さ22mの小島です。島全体が八百富神社の神域となっており、その社叢は387m離れた対岸とは異なる暖帯下部の植物相に属する暖帯林を有することから、国の天然記念物に指定されています。また、島の基盤は花崗岩質で、中央付近には幅30~50mで東西に横切るように黒色の角閃岩の岩脈があり、周囲は崖上に露頭しています。

調査では、島の周囲で矢穴がついた残石29石(うち刻印3石)を確認しました。また、これらには島の東側中央部、西側の北部、中央部、南部の4つのまとまりが見られました。特に、灯籠が据えられた島北西部の露頭には、多数の矢穴が刻まれています。また、刻印は「一+〇+生駒車」「九曜」「九曜+一」があり、いずれも石材は角閃岩でした。名古屋城では角閃岩がごく少数しか見られないため、こちらについては今後検討が必要です。



図2 竹島の矢穴(赤)・刻印(青)の分布図



図3 竹島北西部露頭3Dモデル

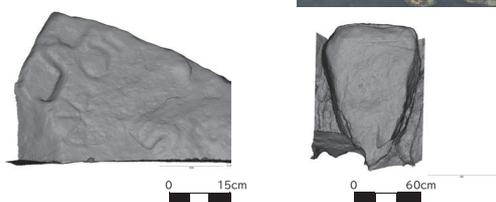


図4 刻印3Dモデル (左「一+〇+生駒車」・右「九曜」)



図5 刻印「九曜+一」

3 西浦半島海岸部の石丁場跡調査

西浦半島は、蒲郡市の南西端に位置する東西約1,100m、南北約2,500mの南向きに三河湾に突き出した半島です。この地域は古くから石材業が盛んで、堅牢な岩盤から切り出された花崗岩は、昭和40年代まで主に伊勢湾や三河湾の港湾、護岸、防潮堤などに利用されてきました。昭和28年に温泉が湧いたことから西浦温泉郷が開かれ、現在は三河湾国定公園の中核として多くの観光客でにぎわっています。

今回は半島先端の海岸部西側で調査を行い、矢穴がついた残石19石(うち刻印3石)を確認しました。北側に集中していますが、南にも2か所で分布する様子が分かりました。刻印には「井」「三左」があり、このうち「三左」は羽柴三左衛門と称された池田照政(輝政)のことで、名古屋城にも刻印が確認されています。なお、『蒲郡市史』では「井」の刻印は西浦半島の海岸部で12石あると報告されています。西浦半島の海岸部では、今回の調査地の東側(西浦パームビーチの東側一帯)でも、矢穴を伴う石材が点在しています。また、刻印がある石の存在も指摘されており、これらの正確な位置の把握を今後も進めていく必要があります。



図7 「三左」刻印3Dモデル

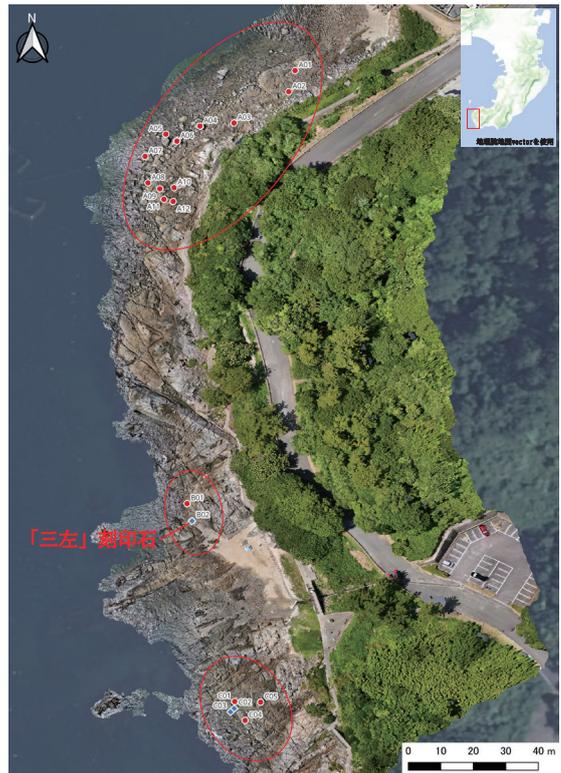


図6 西浦半島海岸部の矢穴(赤)・刻印(青)の分布図

4 医王神古墳石室石材の調査

医王神古墳は、蒲郡市中央部の五井町に所在する、古墳時代後期の横穴式石室を伴う円墳です。現地では、墳土が流れて地表に露呈している石材2石に、縦横に多くの矢穴が打たれています。今回の調査で、そのうちの1石に刻印があることが分かりました。文様については検討が必要ですが、矢穴の状況から、名古屋城の築城時期にここからの採石を意図していた可能性が高まりました。



図8 医王神古墳石室の矢穴

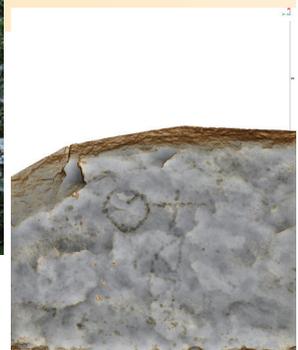


図9 医王神古墳刻印の3Dモデル

5 今後の調査について

蒲郡市内では、これらの他にも西浦半島を中心に名古屋城の石垣採取地が知られています。現在は、それらの石材の所在確認を進めている所ですが、今回紹介した場所とともに、石材・矢穴の形状・刻印など多角的な調査を進め、蒲郡市域における石丁場跡の実像について調べていく予定です。

図10 西浦半島山間部(原山)の矢穴石



明治用水旧頭首工の調査速報 —水中構造物の記録保存—

愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室
山内 良祐

はじめに

愛知県文化財室では、現在、豊田市の矢作川河川内に所在する明治用水旧頭首工の残存状況の把握と3次元立体記録を残すことを目的として2024(令和6)年度から調査を実施している。

1. 明治用水旧頭首工の概要

まず、明治用水とは、愛知県西三河地域を流れる矢作川右岸側の碧海台地の約6,000haを潤す農業・工業用水である。かつて碧海台地上は水が乏しく不毛の地であったが、明治用水の完成により一大農業地域となった。この地域の用水開削について江戸時代後期に一度計画されたが、地元の支持が得られず中断した。その後1879(明治12)年にその計画を引き継ぐ形で開削工事が始まり、1881(明治14)年までに本線およびいくつかの幹線水路が完成した。

しかし、完成した頃は洪水被害などで復旧工事が頻発し、水の需要に十分に答えることができていなかったため、川を横断する堰堤を建設し水流をせき止めて取水する方法が検討された。困難と考えられたこの工事を実現したのが服部長七により開発された人造石工法であり、この時建設された堰堤を明治用水旧頭首工と呼んでいる。

旧頭首工は1901(明治34)年2月に建設が始まり、同年12月に初期工事が完了した。また、1906(明治39)年から船の往来のための船通閘門の建設が始まり、1908(明治41)年に完成した。これ以降、1958(昭和33)年に現在の頭首工が完成するまでの50年程、明治用水の水源としての役割を果たした。

その後、役割を終えた旧頭首工は昭和40年代に一度取り壊し工事が行われたが、人造石で作られた堅牢な構造のため解体は容易ではなく、現在は左岸側の船通閘門とそれに続く排砂門、右岸側の導水堤の一部が残り、その他の部分も水面下に下部構造のみを残している。

2. 調査の方法

明治用水旧頭首工はその大部分が水中に所在する構造物(遺構)であるが、一部は水上で観察できる。そのため、記録保存のための測量も下記のように複数の方法を組み合わせて行った。

写真測量 水上部：UAV(無人航空機、ドローン)または手持ち撮影
水中部：ROV(水中ドローン)

→三次元モデル及びオルソ画像を作成。

三次元レーザ測量 水上部：グリーンレーザ測量

水中部：グリーンレーザ測量

(今回の調査では水深2m程度まで)

ナローマルチビーム測量

(音響計測、水深2m以上)

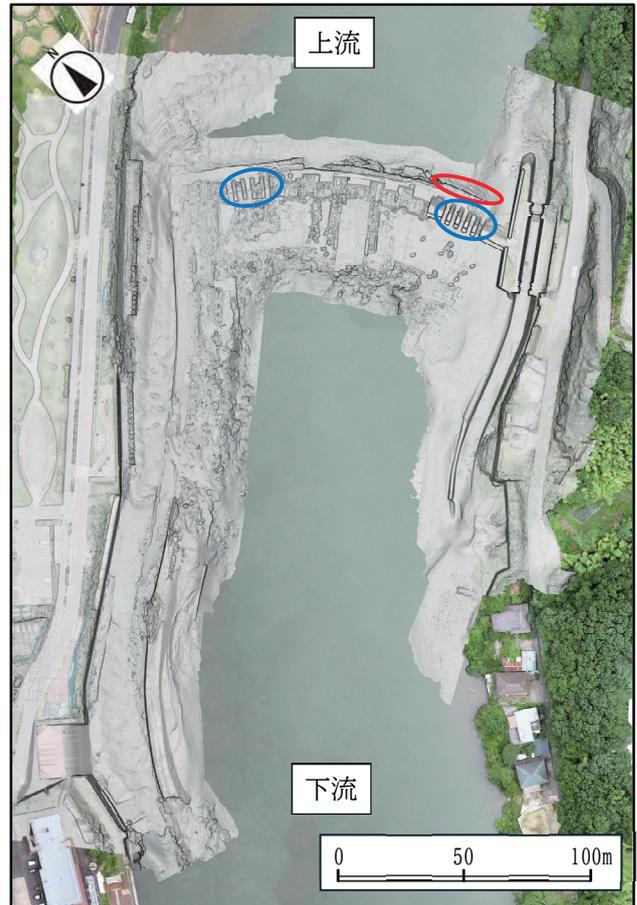


図1 明治用水旧頭首工平面図
(オルソ図+グリーンレーザ+ナローマルチ重ね図)



図2 ROV(水中ドローン)

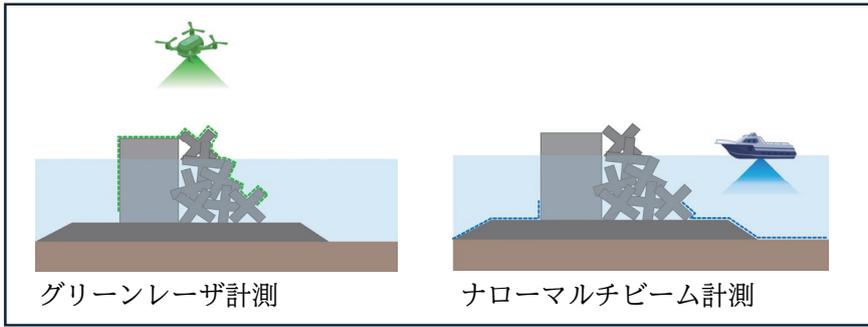


図3 グリーンレーザ計測、ナローマルチビーム測定の計測可能範囲の例

3. 確認された構造物

2024年度の三次元測量の結果、水中に残された下部構造を確認する事ができ、これまで水面下のため確認できなかった全体像、また各部分の詳細な構造を把握できた。

横断堤の上流側(図1赤丸の箇所)では大規模な柵状の構造物を確認した。やや細い縦木10本ごとに太い縦木が1本入り、その縦木を2本の横木で挟み込み、横木は太い縦木とボルト等で固定される。縦木の破損部分から確認できる背面のタタキが層状に重なっている事から、タタキは繰返したたきこんで構築されたと考えられる。また、所々で縦木または横木の圧痕も確認できることからこの柵状の構造物はタタキ施工時の型枠と考えられる。この構造物は当時の設計図にも表現されており、類似するものが導水堤にも現存していることが確認された。



図4 横断堤上流部の柵状遺構(上流から)

横断堤の両端には5門ずつ排砂門が設置されていた(図1青丸の箇所)。左岸側は全体が残存しているが、右岸側は水中に下部構造のみが残存する。形状は、上流側を斜面とし、下流側に垂直な壁と平場をもつ。側面中央付近に傾斜した柱状の築石があり、排砂門の木戸の設置場所と考えられる。それに対応するように門の間の底面には、木戸の戸あたりとみられる段差が設けられている。

現存する排砂門は水上部と水中部があり、写真撮影方法が異なるが、水位差により水上部、水中部の画像に重なり合うバッファを持たせることができたため右のような三次元モデルを作成することができた。



図5 現存排砂門三次元モデル(北から)

おわりに

今回は明治用水旧頭首工の調査成果を速報として報告した。旧頭首工は近代の構造物であるため図面や古写真が残されている。今後は調査成果とそれらの資料を照らし合わせて検討を行い、正式な報告書を作成していきたい。

本調査は株式会社パスコに業務委託をして実施し、今回の発表に際しても多大なご協力をいただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

<参考文献>

愛知県史編さん委員会編、2006、『愛知県史』別編 文化財1 建造物・史跡、愛知県

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室編、2005、『愛知県の近代化遺産』愛知県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室

愛知県稲沢市

ながのきたうら いちめがさ

長野北浦遺跡出土の市女笠

愛知県埋蔵文化財センター 蔭山誠一

1. はじめに

長野北浦遺跡は愛知県稲沢市長野町にある遺跡で、JR 東海道本線稲沢駅の北北西 700m に位置します。付近には、東に隣接する下津宿遺跡、下津城跡、下津北山遺跡、下津本郷遺跡、北丹波東流遺跡、西に隣接する塔の越遺跡、東畑廃寺跡、尾張国府跡などの古墳時代から江戸時代にかけての多くの遺跡が広がっており、古代から中世にかけて尾張国の中心地でありました。

今回とりあげる市女笠は、平成 20 年度の調査で発見された 08A 区井戸 005SE から出土した編み笠についてです。



長野北浦遺跡 (07A 区) 全景、
写真奥 (東) 側に JR 東海道本線 (西から)

2. 市女笠の形状

市女笠は、井戸の底にあった曲物の下から笠の頭頂部を下にして出土しました。井戸の掘削調査の際に、笠の鍔の半分ほどが欠損してしまいましたが、編み笠の頭頂部であるつば状部分が残っていたことから、中世の絵図などに描かれている市女笠にあたるものと推定できます。

大きさは最も残っている範囲で長さ 31 cm 程あり、頭頂部の中央部から鍔のもっとも残っている部分まで径約 20 cm を測ります。笠の頭頂部はその下端部分で径 11 cm、高さ 8 cm あります。よって笠を復元すると径が 40 cm 以上、高さが 8 cm 以上ある大型の笠になるものと推定できます。

笠は樹皮材の幅 1 cm のやや幅広な芯材に、幅 0.8 cm の編み材をタテ材とヨコ材に 2 本超え 2



井戸の曲物の検出状況 (東から)



井戸の断面 (東から)



曲物の出土状況 (南東から)



井戸底の砂止め編笠 (南東から)

本潜り1本送りの網代編みで編んだものです。頭頂部を壺状に作り出し、幅0.7cm前後の細板の輪っかを作り、その輪っかに編みものを樹皮で巻いて固定しています。

笠の縁の仕舞い方法は、外縁部が欠損しているため、形状ともに不明です。

笠は出土した井戸の出土陶器から、13世紀中頃の鎌倉時代のものと考えられます。

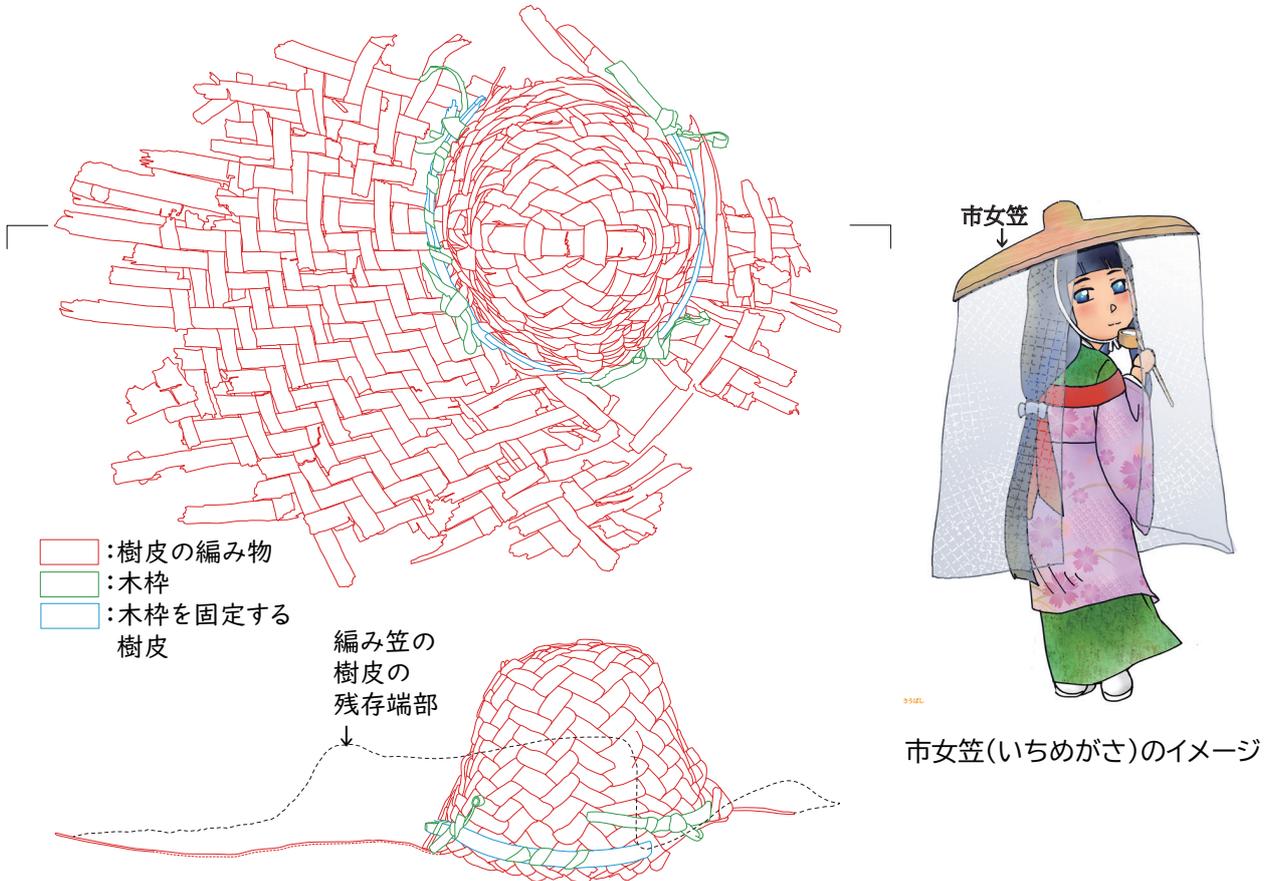
3. まとめ

今回報告します市女笠は、井戸の水溜めの中の砂留めとして置かれていたものです。これまでも清須市清洲城下町遺跡などの井戸の底から同様な用途の編み物の笊ざるが出土したものがありますが、編み物として市女笠の出土例は非常に稀で、中世の絵巻物に描かれている笠の実物を実見できる貴重な成果になりました。

ポスター展示
A13



長野北浦遺跡出土市女笠



市女笠(いちめがさ)のイメージ

長野北浦遺跡出土市女笠実測図 (1:3)

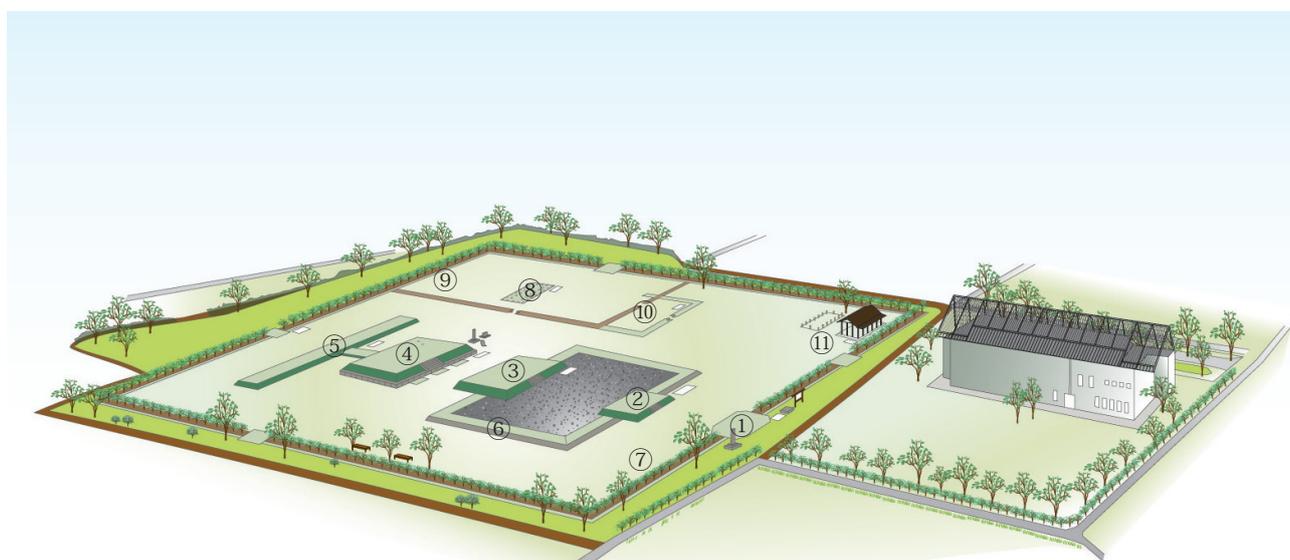
史跡 伊勢国分寺跡歴史公園へ遊びに行こう！

鈴鹿市考古博物館 吉田 真由美

史跡 伊勢国分寺跡歴史公園は、令和2年4月に開園しました。公園の広さは、ナゴヤドームのおよそ1個分になります。今回、公園の見学の「ポイント」2つを紹介します。

史跡 伊勢国分寺跡は、大正 11(1922)年に国の史跡に指定されました。昭和 63 年度から寺域の範囲、平成 11 年度から平成 20 年度まで伽藍を確認するための調査を実施しました。これらの成果をもとに歴史公園として整備を行いました。

中門・回廊・金堂・講堂・僧房・築地は盛土で、南門・食堂・小院築地・北東院築地を舗装でその位置と規模を表示し、説明版を設置しています。また、南東隅の休憩施設は、仮設の仏堂の可能性のある掘立柱建物の位置に合わせて建てています。公園入口に設置した説明版には早川和子氏による復元イラストがあります。このイラストでは、調査で確認された小院を塔院と想定して「七重塔」が描かれています。



①南門 ②中門 ③金堂 ④講堂 ⑤僧房 ⑥回廊 ⑦築地 ⑧食堂 ⑨北東院 ⑩小院 ⑪南東隅建物

ポイント①

講堂 伽藍の中で残りの良かった講堂は、盛土だけではなく、基壇外装、階段基底部、礎石を復元表示しています。

基壇外装 出土した台形磚(レンガ)を再現し、調査で確認された3段分(地下の基底部1段+地上2段)の磚積基壇を復元しています。基壇外装の外観からは磚の断面形が台形であることがわからないため、南東隅を切り欠いて形を確認することができるようになっています。この台形磚は全国に類例のない特異な形です。なぜ、このような形の磚を使っていたのか？伊勢国分寺の謎のひとつです。

基壇の高さ 発掘調査で階段の出が 1.8 mであることが確認されたことから、基壇の高さは 1 m以上あったと推定することも可能です。しかし、1 m以上台形磚を積むことが難しいと思われることなどから、今回の整備では任意の高さ(約 60cm)となっています。

礎石 任意の高さですが、基壇上面に想定される柱の位置を示すために礎石を置いています。現況に残っていた礎石2点と整備のため新たに設置した疑似礎石を使用しました。疑似礎石は、実物と区別のため穴があけられています。



※ QR コードから考古博物館ウェブサイトでは史跡伊勢国分寺跡のリーフレットが閲覧できます。



講堂跡 発出土状況(北から)



講堂跡 整備状況(南西から)

ポイント②

小院 小院の築地は方形に区画していたと考えられますが、調査で北辺が確認されなかったため「コ」字状に舗装で表示しています。この小院の説明版では塔院の可能性について消極的な表記となっています。聖武天皇が「七重塔」を建てるように命じているように国分寺の伽藍の中でも重要な施設です。塔跡の地盤改良工事は、念入りに行われる事例が多いのですが、調査では確認することができませんでした。しかし、近年、基礎地業を行わない塔跡の調査事例が知られるようになり、小院内で確認された建物痕跡の平面形が正方形であることから、現在では塔である可能性は十分あると考えています。



考古博物館と史跡伊勢国分寺跡歴史公園

3階展望デッキからの眺望は一見の価値があります。また、古代から変わらない鈴鹿山脈の山並みを眺めながらぜひ、史跡伊勢国分寺跡歴史公園を散策してみてください。

下呂石原産地・湯ヶ峰の発掘調査—湯ヶ峰山頂遺跡と湯の平遺跡—



知りたいこと (ざっくり解説)

■ 下呂石は岐阜県産の黒曜石

下呂温泉の背後にそびえる湯ヶ峰火山。その活動が、ガラスのように鋭く割れ、金属のように硬い岩石を生み出しました。



下呂石

■ 下呂石の不思議な動き

下呂石は東海地方だけでなく、近畿～関東地方まで運ばれ、石器の材料になりました。とくに気になる動きがあるのは約4万年前（現生人類が日本列島にやって来た頃）と約1.5万年前（縄文時代のはじまる頃）です。



■ 湯ヶ峰で、人々は何をしていた？

下呂石を獲りに湯ヶ峰に登ってきたのはどこの地方の人々だったのでしょうか？ 湯ヶ峰のどこで、どんな方法で下呂石を獲ったのでしょうか？ 手に入れた下呂石でどんな石器を作ったのでしょうか？ そして、その石器はどこに運ばれたのでしょうか？

* 神子柴遺跡の石器写真は『神子柴』（徳母書局出版センター、2008年）から転載



わかったこと (ざっくり解説)

■ 湯ヶ峰を歩き回って遺跡を探しました

→ 新たに約20箇所の遺跡を発見。湯ヶ峰に下呂石を獲りに来た人々が、山の各所で石器を作っていることがわかりました。

■ 湯ヶ峰山頂遺跡を発掘しました

→ 石槍の製作失敗品と、製作にともなう廃棄物が多数出土。溶岩層から下呂石を獲って、石槍に加工していたようです。

→ 下呂石の岩質をうまく使って石槍を作っていたようです。

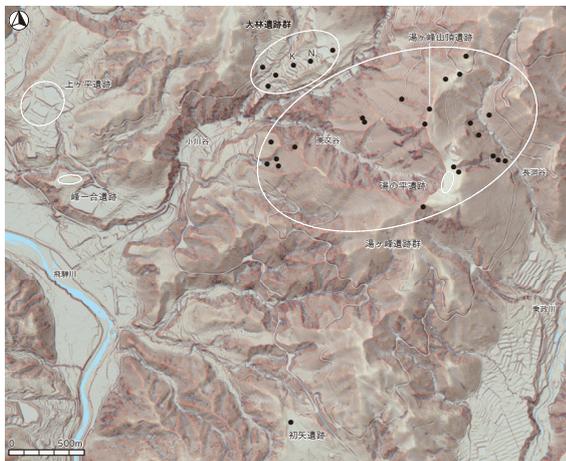
■ 湯の平遺跡を発掘しました

→ 第1調査区では、約1mの厚さで縄文時代の地層（黒ボク土）が堆積していました。約7000～6000年前の地面を検出し、それぞれの時期の下呂石加工の痕跡（多数の石器）を発見しました。どんな石器を作っていたのか、これから調べます。

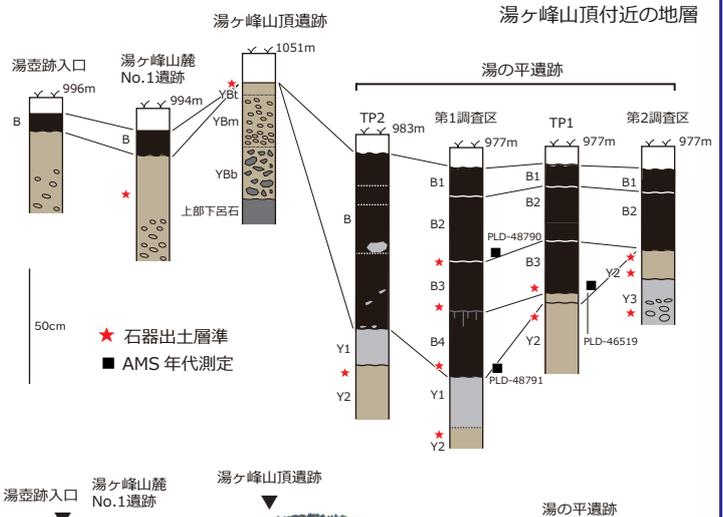
→ 第2調査区では、第1調査区と同じ時期の石器が出土しました。またさらに下の地層（黄色土層、灰色砂礫層）からも多数の石器が見つっています。これらは第1調査区の石器よりも古く、旧石器時代の石器の可能性もあります。



湯ヶ峰の遺跡と山頂付近の地層



湯ヶ峰とその周辺の遺跡 (RRIM®10_2016 をもとに作成)

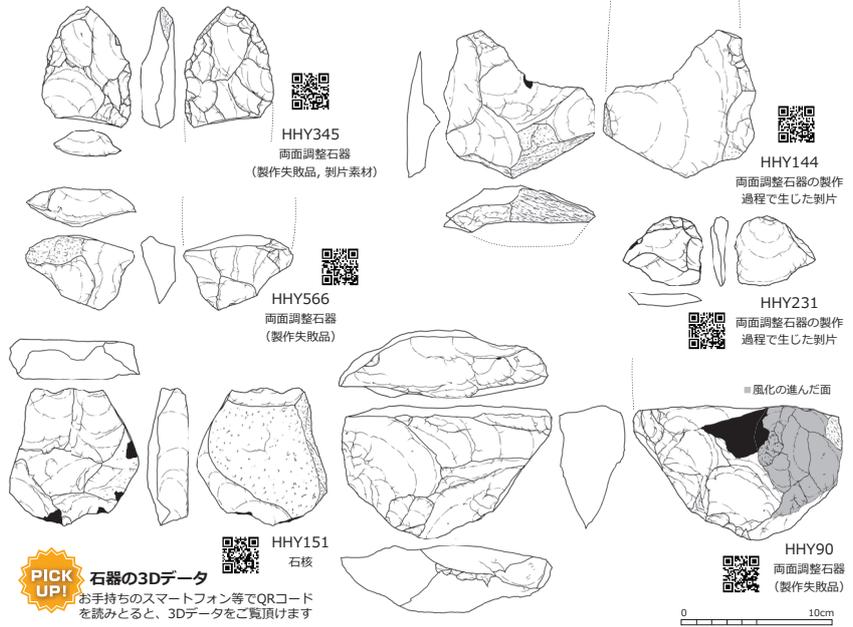


上峯篤史 (南山大学人文学部人類文化学学科教授) ・南山大学湯ヶ峰遺跡群発掘調査団

連絡先: auemine@nanzan-u.ac.jp (上峯), 上峯研究室ウェブサイト >>>



湯ヶ峰山頂遺跡の発掘調査 (2021~2022年度) : 約1万年前の石槍製作址を発見



湯の平遺跡の発掘調査 (2022年度~継続中) :
約7000~6000年前の下呂石加工場を発見



第2調査区の地層

第2調査区



第1調査区 (南区)

第1調査区 (北区)



ポスター展示&調査・研究発表会

B01

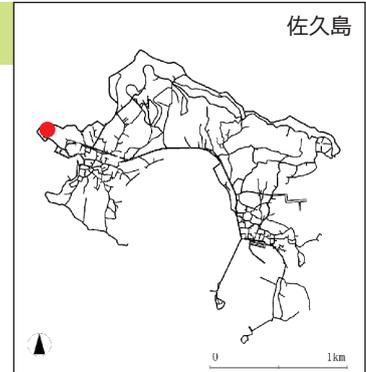
島内最大かつ最古か!?

西尾市佐久島エバス塚古墳の発掘調査

鈴木理絵（西尾市教育委員会文化財課学芸員）

1 佐久島の古墳とエバス塚古墳発掘調査の経緯

三河湾に浮かぶ佐久島では現在 47 基の古墳が確認されており、7世紀代を中心とする横穴式石室を埋葬施設とする古墳が数多く見つかっています。エバス塚古墳は島西側の半島状に突き出た丘陵上に位置する島内最大規模の円墳で、墳丘上には横穴式石室の天井石と思われる石材が残されていました。本古墳はこれまでに発掘調査が行われたことがなく、古墳の実態が不明であったため、墳形や埋葬施設の確認を目的として調査を実施しました。

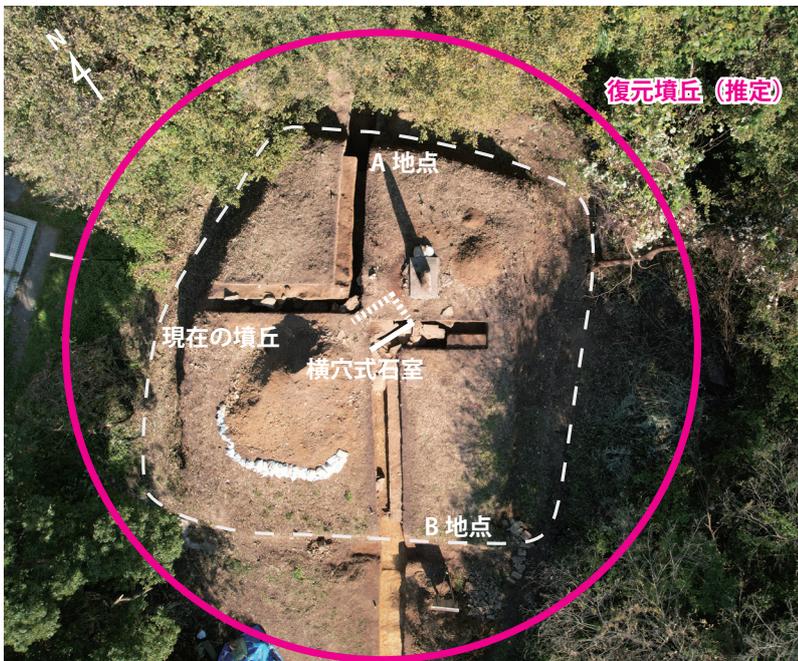


エバス塚古墳の位置

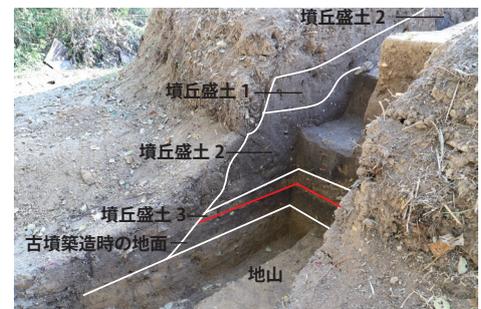
2 調査の成果

(1) 墳丘 断ち割りを行った結果、築造当時の地表面に盛土を行って築かれたことが確認されました。盛土内には古墳時代前期の土器が含まれており、古墳が築かれる前には周辺に集落が存在した可能性があります。古墳の周溝を確認するため墳丘の外側に調査区を設定しましたが、周溝やその他の遺構は検出されませんでした。

墳丘の現状は周囲を開墾のために削り取られ、高さ約 3 m、一辺約 15 m の方形となっていますが、本来は高さ約 4 m、直径約 20 m の規模であったと推定されます。



古墳空撮写真



墳丘盛土確認の様子 (A 地点)



墳丘盛土確認の様子 (B 地点)

さくしま古墳ウォーキングマップ配布中! ダウンロードはこちら ▶



(2) **横穴式石室** 墳頂部中央付近で石室の奥壁と側壁の一部を確認することができました。石室は真西に入口を持ち、奥壁は小さく平らな石を積み上げた多段積みで、側壁は厚さ10 cmほどの板状石材が積み上げられていました。石材は全て佐久島産泥岩（佐久石）が使用されています。

なお、天井石を含め石室の上部は失われており、墳頂部には天井石の石材と推定される石が散乱していました。



墳頂部に散乱した石材



石室の状況

(3) **副葬品** 石室南東隅から須恵器（提瓶）、鉄刀、鉄鏃が出土しました。提瓶はほぼ完全な状態で奥壁付近から出土し、6世紀初頭～中葉のものと推定されます。鉄刀は3片見つかり、同一の刀であったとみられます。鉄鏃は鉄刀の下から多数出土しました。

また、石室の床面を部分的に掘り下げたところ15 cmほど下層から初葬時とみられる床面が確認され、鉄鏃や須恵器の杯片が出土しました。



石室から出土した遺物

(4) **石棺** 板状の佐久石を使用した組み合わせ式石棺で、佐久島内では山の神塚古墳・平古2号墳・外浦古墳などで確認されています。蓋石が完全に残っていることから未盗掘の可能性があります。石棺の小口側には小口の石材を固定するために幅4 cm、深さ3 cmの溝が側板の石材に掘られていました。石棺の床石より15 cmほど下面でさらに古い段階の石室の床面が確認されたため、石棺は追葬時に置かれたと考えられます。



石棺の様子

3 まとめ

エバス塚古墳は島内で最大規模の古墳であることが知られていましたが、本調査で墳丘の構造や石室の存在を確認することができました。石室は、真西に開口する点や側壁・奥壁ともに板石の多段積みの構造であることなど佐久島内の他の古墳では確認されていない特徴を持っていました。これらの特徴や出土遺物から古墳の築造は6世紀前半に遡ると推定され、島内の古墳の多くは7世紀以降の築造とされるため、エバス塚古墳は島内最大で最古の古墳であると考えられます。

2025年度関ヶ原町不破関跡の発掘調査

名古屋大学大学院人文学研究科 考古学研究室
博士課程前期1年 伊藤佑真・高本涼平

1、はじめに

名古屋大学では、2023年度より継続的に、岐阜県関ヶ原町に位置する不破関跡の発掘調査を行なっている。

2、遺跡の概要と調査の目的

不破関は古代の関所で、伊勢の鈴鹿関・越前の愛発関と共に三関の一つに数えられる。

過去には岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会による発掘調査(1973~1978)(岐阜県教育委員会1978)、関ヶ原町教育委員会による分布調査(2010)・試掘調査(2012)が行なわれている(関ヶ原町教育委員会2023)。

本年度は、不破関でも外郭北西隅の状況、およびさらに北方への関の構造物の広がりを確認する目的で発掘調査を実施した。

3、調査の成果概要

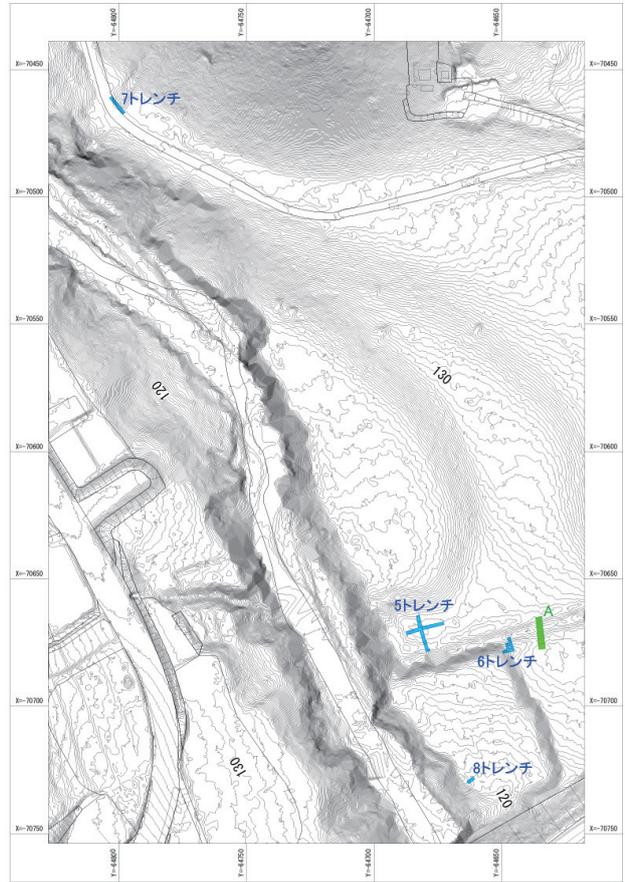
本調査では赤色立体地図を用いた詳細な等高線図を用い、土塁状の構造物や地形の人工的な改変が著しい場所を対象にし、その形成時期・具体的な構造を確認するため、トレンチ(調査区)を4つ設け(5~8tr)掘削を行なった。

以下、調査区ごとに成果概要を述べる。

<5tr>

北限土塁西端のすぐ北側に位置する。ここでは方形区画が見られ、何らかの構造物の存在を想定し、トレンチを十字状に設けた。

その結果、トレンチ中央部付近に掘込地業が確認され、西側・東側では地山を掘り込むように、北側では地山由来の土を盛土した上から地業を行なった痕跡が見られた。地業の規模は東西幅約4.5m、南北幅6m以上である。地業内は大ぶりの礫が多量に混入した土が積み上げられていた。ただ、建物の存在を示す柱穴などの痕跡は確認されなかった。



▲ 図1:令和7年度不破関跡 調査区位置図



◀ 図2: 5tr 俯瞰図

<6tr>

北限土塁西端付近のすぐ南側に位置する。ここでは、人工的な地形の落ちがみられ、これが不破関に伴う構造物かの確認、そして北限土塁内部の構造を再確認する目的で、L字状のトレンチを設けた。

その結果、まず北限土塁を断ち割った南北トレンチ(6a)では、土塁本体の構造が確認できた。特に土塁南側で検出された石積みは、トレンチ外の土塁が露出した部分でも見られ、北限土塁西端の南側を覆う外護列石の跡と想定した。

段差部を断ち割った東西トレンチ(6b)では、斜面の下半部は地山を削った上に粘質土を敷き、礫を貼り付けた様子が確認された。上半部は小礫や土塁積土と同様の黒色土を積み重ね、最上層では礫敷でテラスを造り出していることがわかった。よって段差は土塁と一連の造作と考えられ、**不破関に伴う構造物**と結論づけた。



▲ 図3: 6atr 土層断面図



▲ 図4: 6btr 土層断面図

<7tr>

北限土塁の北方に位置する天満山の南裾に、若干の土塁状の高まりがある。これが不破関に伴う構造物かどうかの確認を目的で、トレンチを設けた。その結果、この高まりは30cm程度の掘込地業に礫を埋設し、その上に



▲ 図5: 7tr 土層断面

幾層かを互層に積み重ねた構造物であることがわかった。この構造は**北限土塁など不破関の構造物との特徴が酷似**しており、これも**不破関の土塁**であると判断した。

<8tr>

北限土塁西端南側の段差部の藤古川寄りの若干の高まりが、人工物であるかどうか調査を行なったが、明確に土塁等の人工物である痕跡は確認できなかった。

4、おわりに

本年度の調査により、出土遺物は全く見られなかったものの、不破関の全体的な構造の一端を明らかにすることができた。特に従来より“自然地形を活かした防壁”と解されていた西側については、積み土や外護列石といったような“人工的な造成が行なわれた防塁”であることがわかった。今後も不破関の解明に向けて調査を進めていく。

謝辞

本調査にあつては、地権者様を始め、関ヶ原町、松尾自治区・柴井自治区の皆様には多大なるご助力を賜りました。末筆ながら心より感謝申し上げます。

本調査は文部科学省科学研究費基金(基盤研究(B))「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」(23K21984、研究代表:梶原義実)の一部である。

参考文献

- ・図1:岐阜県林政部による平成25年度航空測量データの成果を基に(株)イビソク知本孝治様作成
- ・図2~5:中川朋美氏撮影・作成

- 梶原義実2025「2025年度 関ヶ原町不破関跡発掘調査現地説明会資料」岐阜県教育委員会1978『美濃不破関』
- 関ヶ原町教育委員会2023『不破関跡北限土塁確認調査報告書』

名古屋城石垣石丁場跡の調査—西尾市前島石丁場跡—

なごやじょう いしちょうばあと まえしまいしちょうばあと
大村 陸（名古屋市名古屋城調査研究センター）・井口喜景（西尾市文化財課）

1 概要

名古屋城の石垣は慶長15年(1610)に築られました。石垣の石材は尾張・美濃地域などから集められ、採石地であった石丁場跡と名古屋城の周辺には残石（石垣用材として採石されたが石垣には用いられず、採石痕跡が残る石材）が今でも多く残されています。愛知県西尾市の幡豆地区には石丁場跡が点在しており、前島石丁場跡もそのひとつです。採石の実態を明らかにするため、令和6年(2024)に各種調査を実施しました。ここでは調査内容とその成果をご紹介します。

2 位置と環境

三河湾に浮かぶ前島（愛知県西尾市東幡豆町）は、東幡豆海岸から約0.5kmの沖合にある無人島で、かつてはうさぎが放し飼いにされ「うさぎ島」とも呼ばれていました。干潮時には砂州が現れ、トンボロ現象によって歩いて渡ることができます。

前島石丁場跡は『幡豆町史』にて平成19年(2007)に一度調査されており、78個以上の残石があることが報告されていました。分布図は概略図にプロットした図面であったため、現地での再確認ができず、全容を把握できていなかったため、今回改めて調査を行いました。

3 分布調査

分布調査は、まずドローンによる空撮画像から島全体を3次元計測して高精度のオルソ画像を作成しました。現地で確認した残石を1点ずつGNSSで座標取得し、オルソ画像上にプロットした分布図が図3です。

残石は全部で96個確認し、島南部に集中すること、主に3つのエリアに分布域が分かれることが確認できました。



図3 前島石丁場跡 分布図



図1 前島石丁場跡 全景



図2 前島石丁場跡 位置図



図4 前島石丁場跡 B地区景観



図5 前島石丁場跡 B地区でみられる石質

4 石質調査

前島石丁場跡の残石を肉眼観察によって石質調査した結果、暗色包有物をもつ黒雲母角閃石花崗閃緑岩、アプライト様花崗岩、暗色包有物をもたない黒雲母角閃石花崗閃緑岩とアプライト様花崗岩との混在岩などの火成岩が認められました(図5)。特に有色鉱物が少なく細粒のアプライト様花崗岩は、名古屋城でも限定的にしかみられず、本丸北側の不明門付近にて前島石丁場跡と石垣や刻印が一致する石垣を確認しました。採石された石材がどの石垣に使用されたかを示していると考えています。

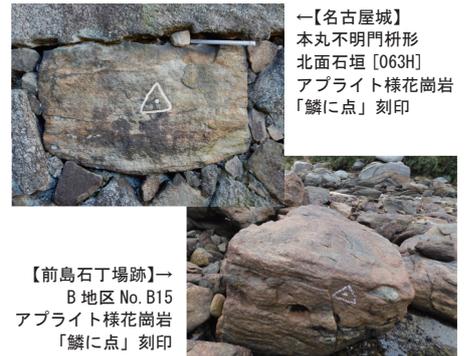


図6 前島石丁場跡の残石と対応する石垣

5 矢穴・矢穴痕調査

残石に残る矢穴・矢穴痕(採石時に彫られた穴)を調査したところ、矢穴口長辺の大半が4~15cmであり、その半数が9~11cmに集中しました。深さは多くが5~13cmで、半数が5~8cmでした。前島石丁場跡と名古屋城の矢穴を比較すると、大半は慶長期石垣の矢穴と大きさが類似する一方で、宝暦期石垣矢穴と類似するものも少数ありました。このことから、前島石丁場跡における主な採石活動の時期は名古屋城築城の慶長期にあり、以降は小規模な活動であったと考えています。

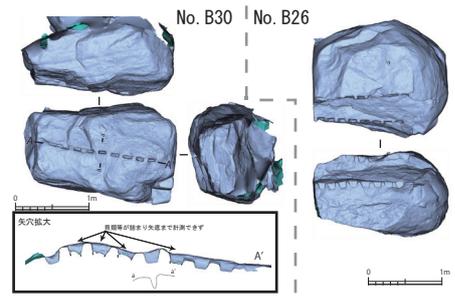


図7 前島石丁場跡 矢穴・矢穴痕 3D モデル

6 刻印調査

前島石丁場跡の刻印(採石時につけられたマーク)調査の結果、5種8点の刻印を確認できました。内訳は「角に」「大の字角轡」「鱗に十の字」が各2点、「三輪違い」「丸に出十字」が各1点でした。名古屋城の刻印と比較すると、「角に大の字」「鱗に点」「丸に出十字」の刻印は福島正則丁場でしか確認できないため、前島石丁場跡では福島正則が採石していた可能性があります。

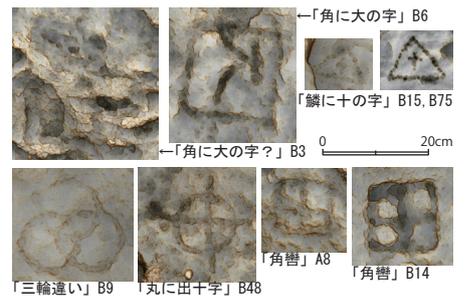


図8 前島石丁場跡 刻印 3D モデル

7 安泰寺「石割奉行の位牌」調査

安泰寺(西尾市西幡豆町)には、法名とともに「石割奉行」と記された「長門国淡屋次郎衛門」の位牌が安置されています。この人物は毛利家史料で慶長15年に尾州名古屋城の御手伝普請奉行として出張中に亡くなったとあり、この周辺で採石していた毛利家家臣が作業中に命を落とし、現地で葬られたものと考えられます。今回の調査で位牌台座にも墨書で「石取之奉行」と書かれていることを新たに確認しました。



図9 安泰寺「石割奉行の位牌」銘文・墨書

8 前島石丁場跡の位置づけ

今回の調査で前島石丁場跡に96個の残石を確認し、三河湾では南知多町篠島に次ぐ大規模な石丁場といえます。刻印から福島正則の石丁場であったと考えられ、対応する石垣も確認できました。豊橋市吉田城でも同一の刻印があり、この影響を明らかにすることが今後の課題です。

本発表は、今年3月に報告した大村陸・浅岡優・高田祐一・田口一男・二橋慶太郎・井口喜景・小山圭嗣による「西尾市前島石丁場跡調査報告」『名古屋城調査研究センター研究紀要第6号』をまとめたものです。右の二次元コードから報告のPDFデータをご覧いただけます(名古屋城公式サイトにアクセスします)。



明治時代における犬山焼窯元・尾関作十郎の活動

犬山焼ミュージアム：井上あゆこ（発表者）、青木修、佐久間真子、宮川菜々子、中野耕司、鈴木智恵、坂口さとみ

文化 7 年（1810）に誕生した犬山焼は、「赤絵」と「雲錦手」の意匠を特徴とし、慶応 2 年（1866）からは、犬山焼窯元の二代目尾関作十郎により継承され、色鮮やかな上絵の伝統技法は、途切れる事無く引き継がれてきた。

安藤コレクション



「赤絵龍文皿」



「雲錦手大皿」

明治維新における犬山焼の動向—幕末から明治—

初代尾関作十郎は、近世犬山焼を支えてきた窯主の加藤清蔵から窯株を譲り受け、それまで生業としてきた瓦焼との兼業により生産を受け継ぐことになった。明治維新後の明治 5 年（1872）、尾張藩の主導した「窯株制度」が廃止となり新政府の管轄下にある明治 9 年（1876）、愛知県庁から「陶器焼竈免許鑑札」「瓦焼竈免許鑑札」が發布され、資本主義に基づく殖産興業の一端を担う「近代犬山焼」の生産が行われることになった。ここでは、初代から三代目尾関作十郎が手掛けた犬山焼を採り上げ、明治 10 年（1877）から明治 45 年（1912）までに国内で開催された博覧会や展覧会、品評会等への出品作品や受賞記録を列記し、「近代犬山焼」の基礎を築いた犬山焼窯元・尾関作十郎の軌跡を紹介するものである。



「瓦焼竈免許鑑札」「陶器焼竈免許鑑札」（表・裏）

犬山焼を支えた人々

	江戸	明治 (1868~1912)	大正
島屋惣九郎	1810~1817		
綿屋太兵衛	1817~1830		
藤兵衛/久兵衛	1817~1830		
加藤清蔵		1822~1871	
松原惣兵衛		1830~1871	
加藤虎蔵		1827~1829	
兼松所助		1830~1859	
道平		1835~1854	
近藤秀胤		1851~1889	
川本治兵衛		1853	
尾関作十郎		犬山にて瓦業 (1842頃~) 1866~ 1873 (二代目継承) ~1896没	
加藤善次		1871~1872	
大澤久次郎		1870頃~	
後藤陶逸		1885頃~	

- 犬山焼窯元
- 陶工・絵付師
- 陶画研究者
- 瓦師

- 島屋惣九郎：犬山城下町の商人。犬山焼を生産するため丸山窯を創業した。
- 綿屋太兵衛：犬山城下町の商人。島屋惣九郎から窯株を譲り受け窯主となる。(= 大島暉意)
- 藤兵衛 / 久兵衛：綿屋太兵衛によって招かれた京都粟田焼の陶工たち。
- 加藤清蔵：綿屋太兵衛によって招かれた上志段味村（名古屋守山区上志段味）の陶工。綿屋太兵衛が丸山窯を廃業して以降、犬山城主成瀬家の支援を受けて窯主となる。
- 松原惣兵衛：上志段味村出身の陶工。加藤清蔵とともに丸山窯の窯主となる。(= 水野吉平)
- 加藤虎蔵：上志段味村の陶工で、犬山で磁器生産を始めたとされる。加藤清蔵の弟ともいわれている。
- 兼松所助：人形細工の原型作りの職工で、絵付師でもある。犬山焼赤絵に若竹色を新たに加えたと言われる。
- 道平：赤絵の名手といわれる絵付師。八代目犬山城主・成瀬正住が道平に雲錦手を描かせたとも伝わる。
- 近藤秀胤：犬山藩士。廃藩後は清蔵・惣兵衛や二代目尾関作十郎とともに陶画研究に尽力。
- 川本治兵衛：尾張瀬戸の陶工で川本治兵衛の二代目。犬山で磁器生産をしたとされる。
- 尾関作十郎：瓦業を営んでいたが、犬山焼を支援。清蔵と惣兵衛の引退後には犬山焼窯を引き継ぐ。現在は七代尾関作十郎が継承。(尾関作十郎陶房)
- 加藤善次：尾張瀬戸の陶工。犬山藩の依頼で物産方として陶磁器生産を始めるが、廃藩置県により短期間で廃業。
- 大澤久次郎：1870 頃より創業。現在は五代が犬山焼窯元として継承。(大澤久次郎陶苑)
- 後藤陶逸：1885 頃より創業。現在は五代が犬山焼窯元として継承。(後藤陶逸陶苑)

尾関家に残る明治時代の活動記録

内国勸業博覧会は、明治政府による外国の新しい技術の紹介と、国内の技術交流による国内産業の発展を目的とした殖産興業政策のひとつである。窯元尾関作十郎は、第一回内国勸業博覧会（明治10年/1877）からの第五回（明治36年/1903）まで、陶器部門に犬山焼などを出品し褒状やメダルを受けている。二代目・三代目の尾関作十郎は、明治時代だけでも博覧会・共進会・品評会など、40件以上の催事へ精力的に出品し褒状・賞牌を得ている。

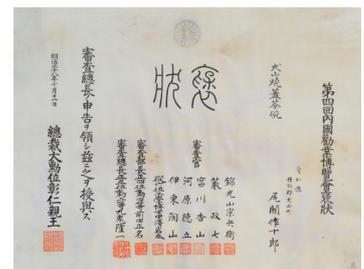
月日	西暦	催事	種類	等賞	作品
明治10年11月20日	1877	内国勸業博覧会	褒状		犬山陶器
明治11年10月24日	1878	愛知県名古屋博覧会	褒状		陶器
明治13年	1880	表：明治十三年宮城博覧会「陶器 愛知県尾張国丹羽郡稲置村尾関作十郎」 裏：賞二等	賞牌（記章）		
明治14年6月10日	1881	第二回内国勸業博覧会	褒状		犬山陶
明治17年6月4日	1884	岩手県勸業博覧会	賞牌	三等	犬山陶器 呉須 赤絵風磁器
		表：岩手勸業博覧会 明治17年 三等 裏：褒賞	賞牌（記章）		
明治23年7月11日	1890	第三回内国勸業博覧会	褒状		鉢 花楓模様
明治25年5月20日	1892	連合共進会	褒賞授与證	六等	桐画六角寸皿
明治28年7月11日	1895	第四回内国勸業博覧会	褒状		犬山焼蓋茶碗
明治28年8月20日	1895	第四回内国国益品展覧会	賞状	有功	陶器（犬山焼） 蓋茶碗
明治33年4月25日	1900	第四回愛知県五二会品評会	褒状	一等	乾山写花紅葉画 蓋茶碗
明治33年8月5日	1900	連合共進会	褒賞授与證	六等	奈良茶碗
明治34年1月29日	1901	犬山庁舎新築事業 瓦受員	賞状		瓦
明治34年5月12日	1901	連合共進会	褒賞授与證	五等	六寸丸皿
明治34年9月22日	1901	第一回全国窯業品共進会	褒状		木蓮花瓶
明治34年11月17日	1901	第五回愛知県五二会品評会	褒状		盃
明治35年5月11日	1902	第六回愛知県五二会品評会	褒状	一等	ビール呑
明治35年6月15日	1902	丹羽郡工産物品評会	褒賞授与之證	三等	奈良茶碗 染付
明治36年6月15日	1903	名古屋物産展覧会	褒状	銅牌	赤絵三ツ揃茶具
明治36年7月1日	1903	第五回内国勸業博覧会	褒状		陶器花瓶
明治37年5月22日	1904	第七回愛知県五二会品評会	褒状	三等	犬山焼各種
明治37年11月10日	1904	戦時記念五二会品評会	記念状		陶器
明治38年2月22日	1905	第八回愛知県五二会品評会 幹事	任命書		
明治38年3月31日	1905	第八回愛知県五二会品評会	褒状	一等	陶器茶具
明治38年5月15日	1905	第八回愛知県五二会品評会 幹事	感謝状		
明治39年5月11日	1906	凱旋記念博覧会	褒状		陶器
明治39年11月11日	1906	愛知県製産品展覧会	褒賞	三等	陶器菓子器
明治39年11月23日	1906	名古屋物産展覧会	記念状	記念金牌	
明治40年5月20日	1907	連合共進会	褒賞授与證	四等	陶器 井
明治40年5月22日	1907	内国商工品共進会	褒賞之證	有功銅牌	陶器 花楓画井
		表：賞／裏：内国商工品共進会之賞 愛知県名古屋市 明治四〇年五月	賞牌（記章）		
明治40年5月30日	1907	内国商工品共進会 幹事	感謝状		
明治41年3月26日	1908	第四回内国物産品評会	褒賞之證	銅牌	陶器 煎茶器
明治41年10月25日	1908	第十回五二会品評会	褒賞之證	有功銅牌	陶器水指
明治41年11月5日	1908	一府十県連合共進会	褒状	四等	陶器火鉢／ 陶器奈良茶碗
明治41年11月15日	1908	第10回五二会品評会 幹事	感謝状		
明治42年5月24日	1909	日本生産品共進会 役員	感謝状		
明治42年10月25日	1909	表：第十回五二会品評会 明治四十二年十月二十五日	賞牌（記章）		
明治42年12月1日	1909	第二回日本製産品共進会 役員	感謝状		
明治43年6月15日	1910	府県連合共進会 役員	感謝状		
明治43年5月18日	1910	丹羽郡工産物品評会	褒状	二等	陶器
明治43年6月5日	1910	第十回関西府県連合共進会	褒状	四等	陶器
明治44年6月20日	1911	第十四回陶磁器及漆器陳列会	感謝状		陶器
明治43年6月	1910	名古屋開府三百年記念新古美術展覧	感謝状		
明治44年9月24日	1911	第二回全国勸業博覧会	褒状	銅賞	煎茶器
		箱：賞牌 第二回全国商業品共進会 ／表：商 第二回全国商業品共進会	賞牌（記章）		
明治44年5月10日	1911	第三回日本製産品共進会 役員	感謝状		
明治45年6月1日	1912	第二回陶磁器並数寄屋道具陳列会	感謝状		犬山焼各種



第一回内国勸業博覧会 褒状
明治10年11月20日



第二回内国勸業博覧会 褒状
明治14年6月10日



第四回内国勸業博覧会 褒状
明治28年7月11日



第五回内国勸業博覧会 褒状
明治36年7月1日



第二回全国勸業品共進会
褒賞と賞牌
明治44年9月24日



ポスター展示 & 調査・研究発表会
B06

矢作川沖積地の弥生時代遺跡 —矢作川河床遺跡採集資料を手がかりに—

安達友隆（南山大学大学院）

本稿の目的

西三河を流れる矢作川の流域では、古井堤遺跡や岡島遺跡などの弥生時代遺跡が古くから知られ、研究が盛んに進められてきた。矢作川の中流から下流にかけては矢作川河床遺跡が広がり、弥生土器を含む様々な遺物が採取できることが一般人を含め広く認知されている。本論考では、南山大学上峯研究室へ前田尚彦氏より寄贈された矢作川河床遺跡の採集資料をもとに、矢作川沖積地に広がる弥生時代遺跡について全体像の解明を目的とする。

矢作川河床遺跡

矢作川河床遺跡の遺物は、矢作川の侵食作用によって遺物包含層が削られ、河原に堆積した資料である。本研究では弥生時代の資料を扱うが、縄文時代晩期の土器や古墳時代以降の土師器や須恵器、古代や中近世の瓦等も見つかる複合時代遺跡である（斉藤 1983）。本寄贈資料は寄贈者の前田氏が知人から譲り受けた資料であり、弥生土器は 45 点ある。土器表面の調整痕や文様の残りが良いもの、甕の脚台部など器形に特徴のある資料が多い。遺物の大きさは長軸が10cmを超えるものも存在する。大きな破片が採集できるということは、資料が川の上流など遠くから流されてきたのではなく、採集地点から決して遠くない場所に堆積していた資料が採集されていると推測される。

図1に矢作川周辺の遺跡分布をまとめた。矢作川河床遺跡の周辺は、矢作川の氾濫原が広がる。多くの弥生時代遺跡は、台地の縁やその周辺に立地する。しかし、河川に近い低湿地が避けられているわけではなく、少なからず遺跡が立地していることがわかる。矢作川河床遺跡の遺物や沖積地の表採遺物について、すべてが台地の縁で営まれた遺跡から供給されたとは考えられない。弥生時代人は河川の氾濫が起きやすい、沖積地の平坦な土地でも生活を営んでいた可能性は高い。

寄贈資料の分析

前田氏寄贈資料を分析すると、弥生時代前期から終末期にかけて幅広い時期の資料が見られる。中でも弥生時代中期後半、特に凹線文系の土器が流入する時期から資料数が急激に増加し、弥生時代後期や終末期の資料が最も多い。本資料は採取時に文様や器形が特徴的である資料が作為的に集められた可能性は高い。実際に、資料中において甕の口縁部より脚台の数が多点や、多くの資料で文様が施されている点からも、本資料に偏りがある事実は認めなければならない。無文であるために採集されなかった資料も数多くあると考えられる。

しかし、凹線文系土器が出現する時期からは土器の無文化が進む。無文化が始まる土器型式の時期から資料数が増加するという事は、遺跡の規模が拡大している可能性が考えられる。資料数から見ると、弥生時代における矢作川河床遺跡は、凹線文系土器が流入した以降に遺跡の最盛期があることは間違いない。

凹線文系土器の流入

矢作川流域や伊勢湾沿岸地域を含めた東海は、近畿から凹線文が流入する時期を境に土器が大きく変化する。それまで地域ごとに独自色の強い土器を製作していたが、凹線文系土器が伝わると土器が斉一化し、一つの大きなまとまりとして捉えることができるようになる（石黒・宮腰 2006）。凹線文系土器の流入という大きな土器の型式変化と合わせて、矢作川河床遺跡において資料数が爆発的に増加する。

土器の出土量が増えたことを人口の増加に合わせて土器需要が増えたと見れば、この現象は土器の情報だけが伝播したのではなく、土器の情報と共に集団が大きく動いたと考えることができよう。土器器形や出土数の変化の要因については、沖積低地遺跡の発掘調査事例が少ないため、分からないことが多い。今後の発掘調査等の結果をもとにさらなる議論ができることを期待したい。

謝辞

本論考は、弥生土器を含む多数の資料を寄贈いただいた前田尚彦氏のご協力により、研究を進めることができました。また、指導教員である上峯篤史先生にはご支援をいただきました。感謝申し上げます。

引用文献

石黒立人・宮腰健司 2006 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』, pp. 129-189。
 齊藤嘉彦 1983 「矢作川河床遺跡と遺物」『岡崎市史研究』。

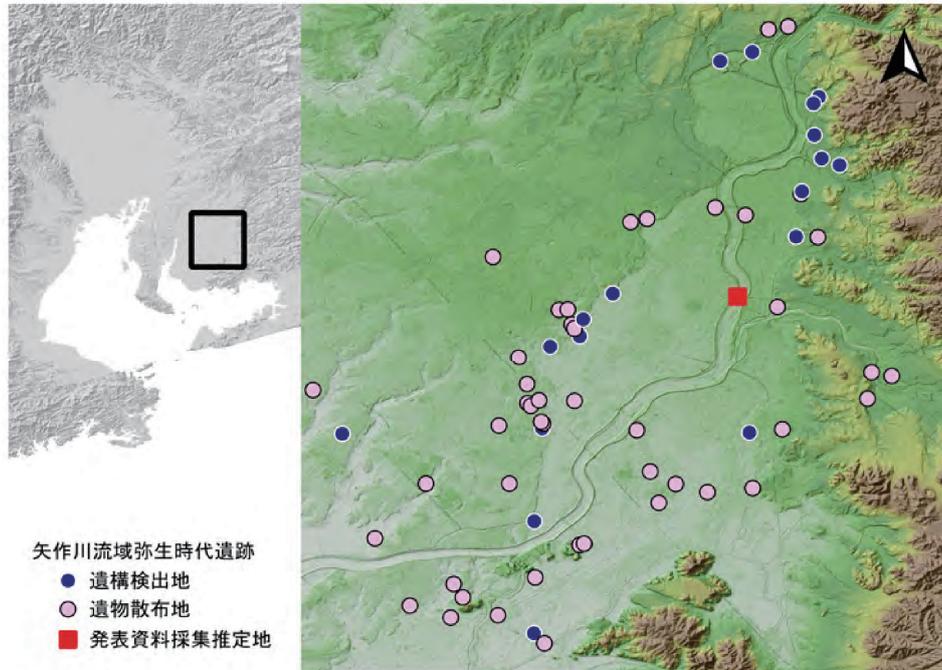


図1 矢作川流域の弥生時代遺跡

地理院タイル（陰影起伏図）、AW3D30 解析地形データ（©JAXA）、文化財総覧 webGIS を利用し作成

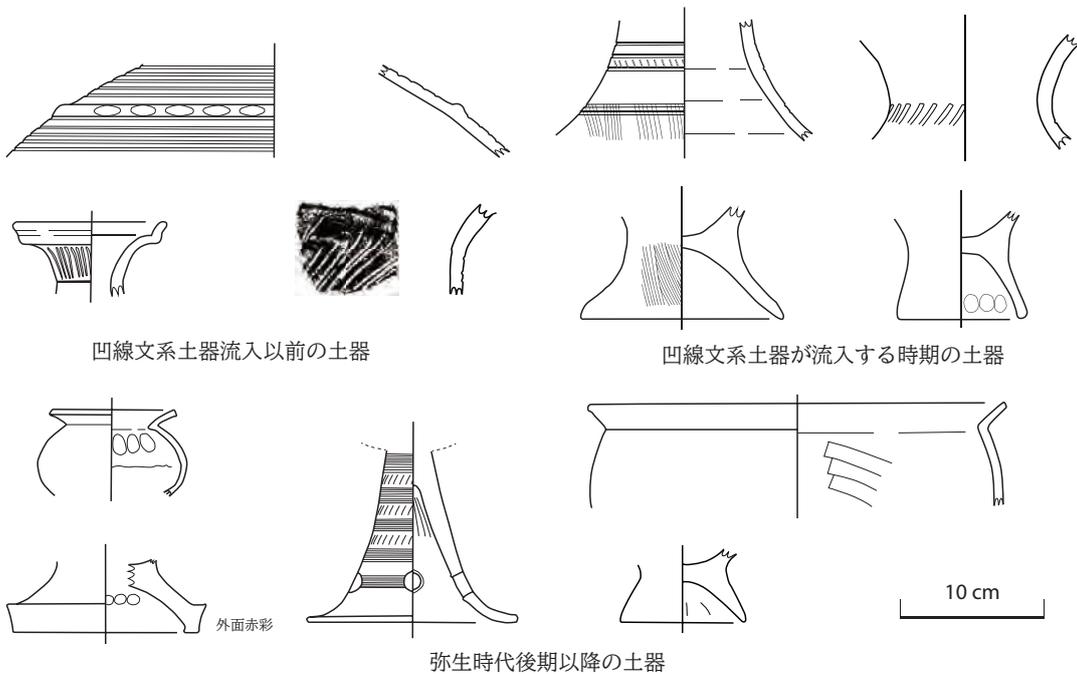


図2 矢作川河床遺跡採集資料

調査の目的

乾屋敷古墳は、史跡野古墳群を構成する前方後円墳です。野古墳群で最初に築造されたと考えられています。墳丘は、南半が削平され、原形が大きく損なわれています。このことに加えて、土留めの石垣の劣化などの課題が深刻化してきたことにより、保存方法等を検討するための基礎的な情報の把握を目的に、令和3（2021）年度から調査を進めています。

調査の経過

乾屋敷古墳は、全長 78 m ほどの前方後円墳とされてきましたが、これまでの調査で後円部の墳丘裾が 2 カ所で確認され、想定よりかなり規模が大きいことが判明しつつあります。また、前方部の墳頂では円筒埴輪列が一部残存していることも確認されました。

トレンチ 1

南北に 2 つのトレンチを設定しました。

北トレンチでは、第 1 段目の墳丘斜面の葺石および周濠を検出しました。周濠内からは墳丘の第 2 段目から転落したと考えられる葺石の間より、円筒埴輪・朝顔形埴輪・台付甕などが出土しています。墳丘盛土は、近世から近代にかけて大きく削平され、整地されていました。

南トレンチでは、周濠の肩部を検出しました。周濠は 20～30 cm 程度浅くなっており、これは築造当時の地形が南側に低かったことによると考えられます。

周濠埋土からは、山茶碗や五輪石（火輪）が出土しています。

トレンチ 2

トレンチ西端で地山を掘り込んで構築された周濠の肩部を確認しました。

周濠内は、黒褐色土と黄褐色土を交互に重ねた整地層がみられ、その上に土塁状の盛土を検出しました。これは関ヶ原合戦後に織田河内守長孝が構えた城館の土塁の跡と考えられます。

周濠内の埋土などから埴輪片が出土しています。

トレンチ 3

南東から北西の方向に溝状の遺構が確認できますが、これは古墳に伴うものではなく、近年まで生きていた水路の跡である可能性が高そうです。トレンチ東端では若干の埴輪片を包含する土層が確認されています。

トレンチ 4

後円部の第 3 段目の墳丘盛土を面的に検出しました。後円部の墳頂縁辺に配置された埴輪列の想定される位置でしたが、近世以降のかく乱によって削平を受けて完全に失われていることがわかりました。



図 1 野古墳群の分布図

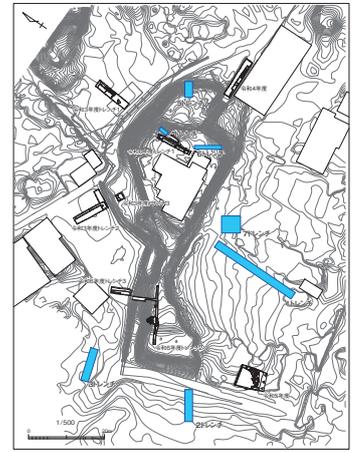


図 2 乾屋敷古墳の既往の調査区および 2025 年度調査区



図 3 トレンチ 4 土層堆積状況

サブトレンチを設定して、盛土の構築状況を確認したところ、色や性質の違う土が層になって重なっていることを確認しました。

かく乱土の中から円筒埴輪片と、近代以降の陶磁器片が出土しています。

トレンチ5

表土下には後円部の第3段目を削平した際の土が厚く堆積していました。その土を除去すると、2個体分の埴輪が隣接した状態で検出されました。これは、後円部の第2段目の平坦面に配置された埴輪列の一部と考えられます。後円部の第2段目の斜面は、旧土地境界付近で垂直に削平を受けており、上半の一部の検出にとどまっています。

トレンチ6

後円部第3段目の盛土を検出しました。

トレンチ北東壁からは、トレンチ4と同様に色や性質の違う土が交互に積み重なっていることを確認しました。後円部の仮の中心点付近では、墳丘盛土に不整合な箇所があり、その検出位置から墓坑埋土である可能性も考えられます。

トレンチ7

北から南に向かってなだらかに傾斜する面を検出しました。サブトレンチを入れると、下層は地山で、その上は盛土であることがわかりました。上部は削平を受けていましたが、なだらかな傾斜があり、これは古墳の斜面の名残と考えられます。このことから、後円部の第2段斜面か第1段平坦面に近い部分と考えられますが、葺石や埴輪等を検出できていないためわかりません。

地山と盛土の境界付近に複数、直径30cmほどで深さも30cmほどの土坑を検出していますが、性格や時期等は不明です。

出土遺物

ほぼすべてのトレンチで円筒埴輪・朝顔形埴輪の破片が出土しています。蓋形埴輪と考えられる形象埴輪が、今回初めて出土しました。

円筒埴輪は黒斑をもち、ヨコハケを施すもので、古墳時代前期末～中期初頭ごろに製作されたものと推測できます。

中世の土師器や山茶碗、五輪塔の一部なども葺石転落石上から出土しております。このことから、その時期までは墳丘の第1段目も埋もれずにいたことがわかります。

今年度調査の意義

これまであまりわかっていなかった前方部の構造や規模、構築過程が詳細になってきました。また、後円部の埴輪列や墳丘盛土の状況が明らかになったことも大きな成果です。

埴輪からは、乾屋敷古墳が野古墳群において最初に築造された前方後円墳であるというこれまでの見解を追認することができました。

今後これらの成果を総合的に検討し、乾屋敷古墳の実態について詳らかにしていきたいと思えます。

本報告に関するご意見・問い合わせ

南山大学原田研究室 nanzan-harada.labo2025@outlook.jp

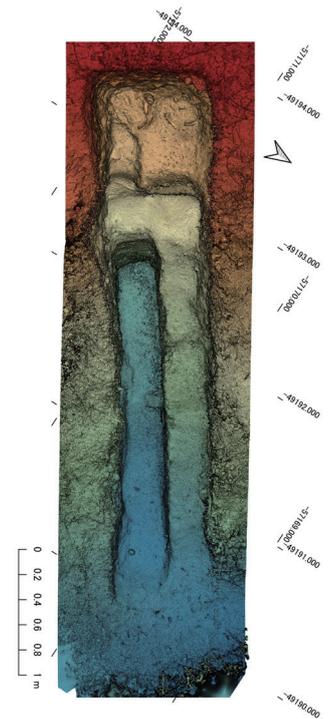


図4 トレンチ5
段彩陰影起伏図



図5 第2段目平坦面埴輪列検出状況



図6 トレンチ6後円部墳頂中心付近
の土層堆積状況



図7 遺物集合写真

新発見!! 見えてきた幸田町青塚古墳の 素顔

滋賀県立大学考古学研究室 神谷駿介 尾崎祐世 金宇大准教授
幸田町教育委員会 文化スポーツ課

1. 青塚古墳の概要

青塚古墳は、愛知県幸田町坂崎弁天に所在する前方後円墳とされる古墳である。明治43年の耕地整理の際に石室が発見された。築造当初の墳丘全長は約38mと推定されるが、耕地整理によって削平され、現在は約20m程度となっている。築造時期は、出土品や石室から5世紀後葉から6世紀前葉と考えられている。

2. 調査に至った経緯

明治43年の耕地整理後、昭和4年に学術的な調査が改めて実施された。この際、郷土史家の小野宗重氏により調査の詳細を記した『古墳記』が残されている（写真1）。調査後、古墳は埋め戻され、地元の人々によって今日まで守られてきた。

平成22（2010）年および平成29（2017）年には、青塚古墳の本来の規模を確認するための発掘調査が行われた。その後、令和5（2023）年6月、豪雨により石室上部が一部露出する被害が発生した。この事態を受け、幸田町教育委員会は古墳の修復と将来的な保存・整備・活用を見据え、滋賀県立大学と共同で青塚古墳の調査・研究プロジェクトを立ち上げた。



写真1 古墳記表紙

3. 墳丘くびれ部の調査

第3・4次調査では墳丘の北側くびれ部に調査区を設け、掘削を試みた。その結果、墳丘斜面を覆う葺石が全面に検出された。さらに、その葺石を東側に拡張すると北側方向に85度屈曲していることを確認できた。通常の前方向後円墳と比べて屈曲角度が大きいことから、**特異な墳丘くびれ部を持つ古墳**であると考えられる。また、葺石の下部からはテラス状の平坦部が現れ、そこから7点の埴輪が並列した状態で出土した（写真2）。

この調査結果を踏まえて、第5次調査では反対側の南側くびれ部に調査区を設け、範囲確認を行った。南側くびれ部付近では近世以降に大規模な改変を受けており、葺石および墳丘盛土ごと削り取られていた。しかし、一部現位置を保ったとみられる葺石も残存しており、その状況から、北側と同様に前方部から続く墳丘斜面くびれ部付近で90度近く屈曲していたと推定される。また、調査区の一部を南側へ拡張したところ、ほぼ垂直に立ち上がる石積みを検出したが、葺石ではなく、近世以降につくられたものであることが判明した（写真3）。



写真2 北側くびれ部



写真3 南側くびれ部

4. 出土遺物

青塚古墳では調査区のほとんどから埴輪が出土している。特徴的なのは須恵器の製作技法を用いて製作された「**尾張型埴輪**」である。通常の橙色をした埴輪と須恵器と同じ青灰色をした埴輪とが混在している。円筒埴輪が中心的ではあるが、人物埴輪や家形埴輪、蓋形埴輪など形象埴輪も多数出土している（写真4・5）。

石室内からは明治期に被葬者と考えられる人骨も発見されており、今回の調査で改めて再検査を行った。その結果、年齢30代後半～40代前半の壮年の男性であり、身長は166.4cmということが分かった（写真6）。



写真4 須恵質の円筒埴輪



写真5 蓋形埴輪出土状況



写真6 出土人骨

5. 石室の調査

(1) 石室内部の調査

青塚古墳の石室は「**竪穴系横口式石室**」と呼称される、竪穴式石室から横穴式石室への過渡期に位置づけられる構造であり、北部九州を源流としていると考えられる。

石室内部（玄室）は全長約5m、幅約1.3mであり、中央がくびれる撥形を呈している。石室の側壁は、周辺で産出される板石を使用して構築されている。また、床面は大小の礫を敷き、平坦ではなく、段構造を有している。真ん中には大きな3枚の石によって閉塞されており、外側には入口部（墓道）が接続している（写真7）。これらの閉塞石は天井石に直接立てかけられているため、外側からは天井石は見る事ができない。しかし、その上に別の石を載せることにより、「**見かけ上の天井石**」として利用していることが想定される（写真9・図1）。

昭和期の調査時には、刀剣や玉類の他、鹿角製刀装具や金銅製の帯金具など豊富な副葬品が見つかった。その際に被葬者の人骨も発見されたが、これは昭和期の調査後に石室内に戻され、逆さにした甕が被されていた（写真8）。



写真7 奥壁側から見た石室



写真8 人骨に被せられた昭和の甕



写真9 石室入口部

(2) 石室入口部の調査

墓道とは竪穴系横口式石室の特徴の一つであり、石室の構築や葬送儀礼を行うための通路である。青塚古墳では**急角度の階段状構造**になっており、石室を構築する際の作業用通路としての機能もあったと考えられる。墓道の埋め戻しの際には、赤茶色の土と黄色の土を交互に積み重ねていることを確認できた（図1）。



図1 石室入口部模式図

6. まとめと展望

これまでの調査により、北側・南側ともに特異な形状をもつくびれ部の墳丘であることや竪穴系横口式石室の内部および入口部分の構造に関する詳細が明らかとなり、大きな成果が得られた。また、出土遺物についても、大量に出土した埴輪の接合・検討や人骨の再検査などを通して、多くの知見を得ることができた。

一方で、墳丘や周溝の正確な形状、石室入口部の範囲については、なお不明瞭な点が多く、今後の調査の進展が期待される。将来的な保存・整備事業に向けて、これまでの調査で得られた成果と課題を整理し、さらなる調査・研究を進めていきたい。

設楽地域と磐田原台地の白色風化石材

東海石器研究会 神取龍生

1 各地域の岩石環境

【設楽地域】

設楽地域では、①南設楽層群（設楽火成複合岩体）における溶結凝灰岩帯と、②北設楽層群における泥岩帯において、剥片石器に適した硬さ・鋭利さを保有する岩石を産出する。①は、寒狭川の支流である海老川左岸に展開する棚山高原である。これまで、川売の集落を通る谷川を中心に緑・白系、珪質、無斑晶を中心とした溶結凝灰岩を海老川へ供給していることは報告してきたが、棚山高原に源流を持つ大石川や分野川も、良質な溶結凝灰岩を海老川に供給している事が確認できている。また、棚山高原以外では、豊川本流に流れ込む支流宇連川の上流（鳳来湖から更に遡った地域／宇連分校跡地附近より上流）において赤系、珪質、無斑晶の硬質溶結凝灰岩が大量に産出することが確認できている。この両者の溶結凝灰岩は、ともに鳳来寺山が噴火した際の噴出物であるため、偏光顕微鏡下も、蛍光 X 線分析においても、大きな違いはない。

この2地域は、緑色系統を主に供給する宇連山南麓の棚山高原、赤色系統を主に供給する東麓の宇連地域として、宇連山を中心に整理ができる。萩平遺跡のように、寒狭川と豊川の合流地点より下流に位置する遺跡においては、遺跡への2系統の岩石供給の推定ルートが存在することになる。

②は寒狭川の支流である野々瀬川上流であり、灰色系、珪質、細粒の硬質泥岩が産出する。野々瀬川泥岩は、非常に良質であるが、露頭が確認できている訳ではなく、鹿島山南西麓の斜面堆積からの岩石塊の産出でしかない。この野々瀬川以外で、珪化の進んだ硬質泥岩の安定供給が確認できるのが、海老川の玖老勢地域である。特に玖老勢橋から寒狭川との合流地点にかけての河原に、良質な泥岩が集中する。偏光顕微鏡下では、玖老勢泥岩は野々瀬川泥岩に比べると、火山ガラスが存在感を見せている。

【磐田原台地】

台地の西側を流れる天竜川水系と東側を流れる太田川水系があり、天竜川水系では、支流気田川及び、気田川の支流である不動川や杉川が、石器素材に適した岩石が採集可能な地点である。太田川水系では、太田川上流にあたる三倉川、支流原野谷川に流れ込む西之

谷川・丹間川を中心に、硬質で、肌理が細かく均質な珪質泥岩が産出される。なお、これらの産地は、水系は異なるものの、その産出母体は、四万十帯三倉層群と犬居層群に該当する。この両群から産出する黒色泥岩は、カルサイトの有無で分けることができる。顕微鏡下では三倉層群の石は表皮の色調（黒・黄土色）に関係なくカルサイトが多く見られる。また蛍光 X 線分析でも元素 Ca の含有量が非常に多い。逆に犬居層の石は外皮が黒いものにはカルサイトがほとんど含まれていない。本流の気田川や天竜川で採取できる黒色珪質泥岩は、カルサイトや Ca の含有量がほとんど見られないことから、犬居層群の特に杉川が主たる供給源と言える。

2 遺跡出土の白色風化石材との比較

【山田原Ⅱ遺跡】

磐田原台地の遺跡では、灰白色に風化したシルト岩が主たる石器石材として用いられているが、少ないながらも、白色～黄灰色に風化した石材が含まれている。これらの石は、三河地方の旧石器時代遺跡で出土する白色風化石材（溶結凝灰岩・泥岩）に酷似した石である。筆者等は、磐田原台地の代表的な遺跡である袋井市山田原Ⅱ遺跡に着目し、その石核資料を肉眼観察（裸眼・実体顕微鏡）で分類し、13 / 92を設楽系岩石として仮分類した。その視点を踏まえ、第5ブロックの資料からサンプルとして「溶結凝灰岩」を5点、「シルト岩」を6点を選択抽出し、岩石薄片を作成し、岩種の確認を行なった。

その結果、「シルト岩」は全て天竜川水系犬居層泥岩とした。一番大きな基準はカルサイトの有無である。杉川から送られた岩石が気田川そして天竜川に流れ出る中で、旧石器時代に人に石材に適した石として採取されたのであろう。当初は石が採取できるということ、断崖を降りずに石を採取に行けるという地形的な理由から磐田原台地への供給源として太田川水系も視野に入れていたが、今回の観察を踏まえると、天竜川水系における採取が基本と考えざるを得ない。

「溶結凝灰岩」は、4点が棚山系溶結凝灰岩、1点が設楽系泥岩であった。溶結凝灰岩の供給源については、石核の中に、宇連の原産地で確認できるような凝灰岩が付着したタイプの物も含まれることから、棚山や宇連川

から豊川を北上し、天竜川経由して磐田原台地へ持ちこまれた可能性を想定している。また泥岩は火山ガラスや有色鉱物の状況から野々瀬泥岩に近いようにも見受けられる。溶結凝灰岩と同様のルートを経て、磐田原台地へ運び込まれたのであろう。

謝辞

本研究は袋井市教育委員会のご厚意で行えたものであり、特に山本義孝氏には大変ご援助を賜った。

また、三遠南信地域の石材研究は、平井義敏氏、成瀬陽介氏の協力に依るところが大きい。記して厚く謝意を表します。

本報告には、JSPS 科研費奨励研究「旧石器時代東海地方西部における『白色風化石材』の岩石種と原産地の同定について」（課題番号 24H02358）による成果と、2022年・2024年愛知大学総合郷土研究所研究費による成果を一部含んでいる。

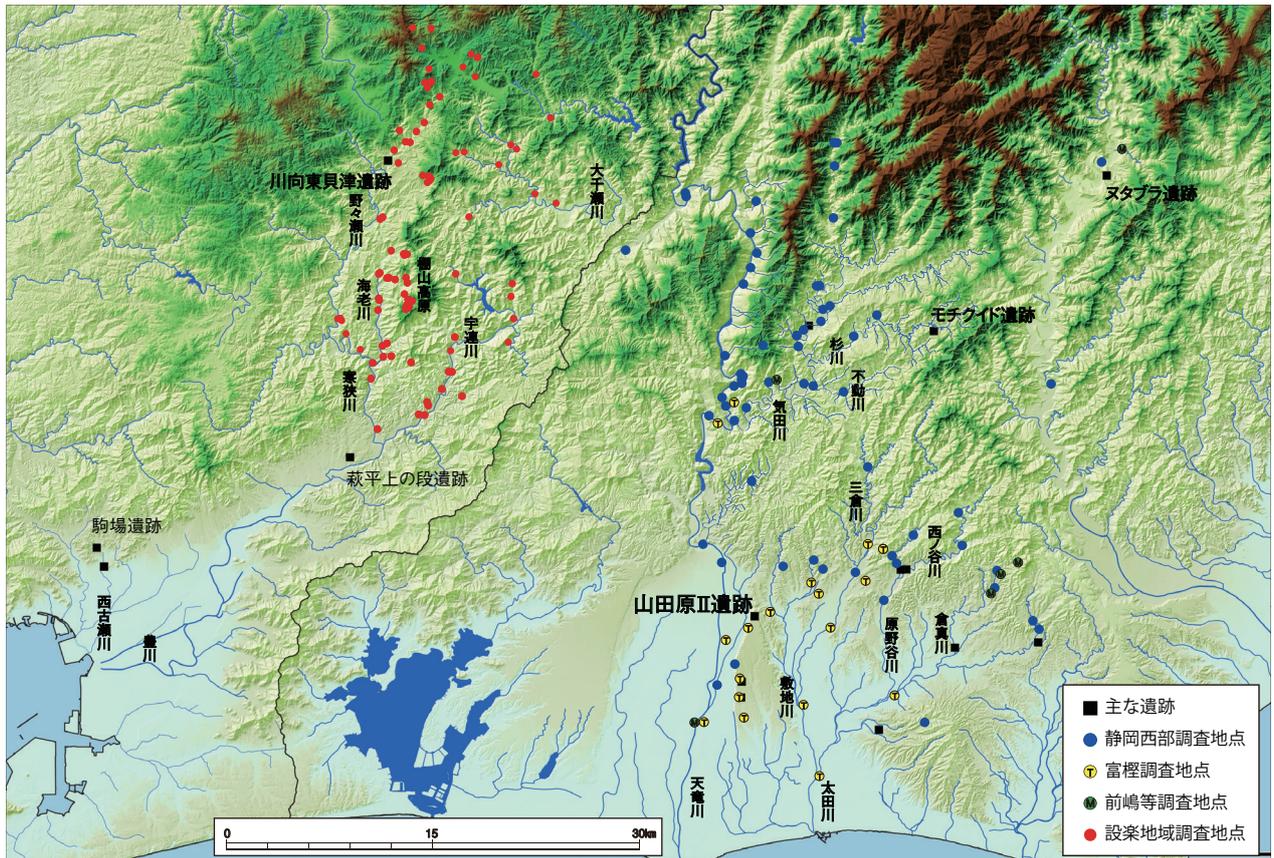


図 1 踏査地点

ポスター展示&調査・研究発表会
B10

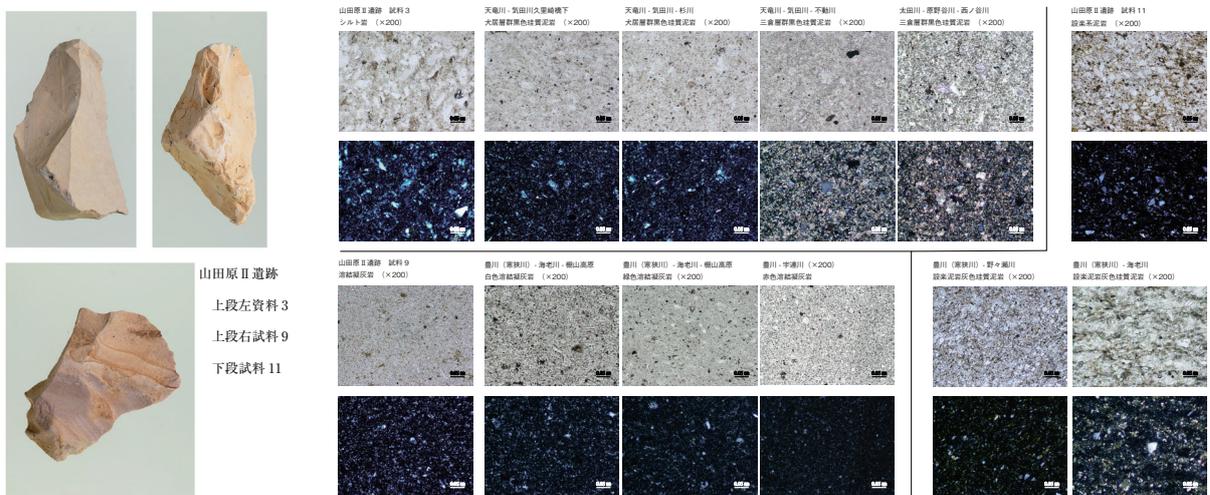


図 2 試料写真・偏光顕微鏡下 単ニコル・直交ニコル



fig8. 「遊行縁起」に描かれた複材制舟または準構造船
【長島尚道編 2012】を基にトレースして作成

1. 本発表の目的

本発表は、古代から中世にかけて、近江（滋賀県）湖東地域の要港として栄えた「朝妻湊」を出航し、各地に荷物を運送した船の種類とその積載量を検討するものである。

具体的な検討内容は下記の通りである。

- ①古代末～中世前期にかけて、近江湖東～湖北地域を中心に平安京まで流通した尾張産窯業製品を例に、運送コンテナである常滑大甕に詰めた際の内容量を検討。
- ②上記のコンテナを運送し得た船について、出土例や絵巻物を参考に検討。
- ③実際に船に積載できるコンテナの量から、尾張産窯業製品の積載数を検討。



fig 1. 尾張と平安京方面を結ぶ道とその周辺

朝妻湊の一画である朝妻沖湖底遺跡では、遅くとも8世紀後半には尾張産窯業製品が出現し、11・12世紀をピークに、13世紀前半頃まで継続する（中川ほか 2021, 2023）。これら遺物には湊周辺の人々の生活に関わる遺物のほか、流通過程の選別等で廃棄されたと考えられる遺物が含まれる。

具体的な遺物としては、日用品では供膳形態である碗や小碗（小皿）、調理形態である片口鉢がある。また特殊品としては瓦や三筋壺などがあるが、特に瓦は平安京や鳥羽離宮で用いられた。さらに、多数を占める甕は、商品であると同時に、流通コンテナとして用いられたと考えられる（fig1）。

2. 検討に用いた遺物の大きさや重量

検討に用いた遺物の大きさは、fig2の通りである。遺物の重量については、同時代資料のうち、完形もしくはほぼ完形を保つものを計量し、平均値を算出した。

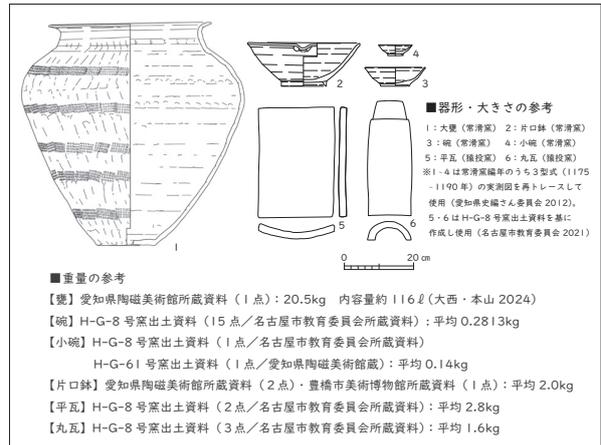


fig2. 検討の基準とした遺物の大きさや重量

3. 常滑大甕に内容物を詰めた際の重量

(1) 詰め方の方針

管見の限り、実際の詰め方が判明する出土事例は見いだせない。よって「詰め方の復元」ではなく、「詰め込みとどれだけの量が入り、どれだけの重量となるか」の確認作業として実施した。遺物1点1点の隙間に、丁寧に緩衝材（藁等）を詰めることは想定していない。ただし、甕との接点や、大きく隙間が空く部分には、緩衝材が存在するものとした。また、運送中の状況を安定させるため、内容物はできる限り高密度に詰めるものとした。

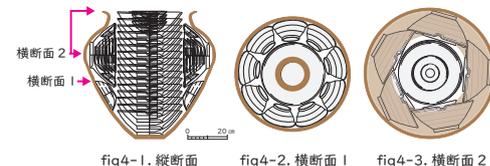
(2) バランスよく詰めた場合 (fig3)

碗 82点、小碗 45点、片口鉢 10点、大甕 1点
→23.1kg+6.3kg+20kg+20.5kg=69.9kg



(3) 片口鉢をできるだけ多く詰めた場合 (fig4)

碗 33点、小碗 21点、片口鉢 21点、大甕 1点
→9.3kg+2.94kg+4.2kg+20.5kg=74.74kg



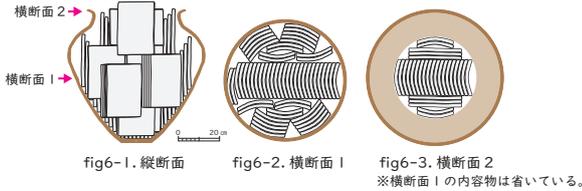
(4) 碗をできるだけ多く詰めた場合 (fig5)

碗 153点、小碗 19点、片口鉢 3点、大甕 1点
 →43kg+2.7kg+6kg+20.5kg=72.2kg



(5) 平瓦を詰めた場合 (fig6)

平瓦 89枚、大甕 1点 →249.2kg+20.5kg=269.7kg



(6) 小結

碗・小碗・片口鉢を詰めた場合、コンテナ（常滑大甕）を含め、70～75kgでまとまる。甕の大きさを考慮しても、大人2名程度で問題なく移動することができる。

瓦については、仮に平瓦を満載した場合、重量が約 270kg に達してしまう。人力での運搬が困難なのはもちろん、商品としての甕そのものが割れてしまう可能性が高い。

以上の点から、碗・小碗・片口鉢はコンテナ利用による運送、瓦は縄等である程度束ねたものを船に直接搬入か。

4. 流通の主体となった船

(1) 刳舟（丸木舟）が主体となる可能性は低い

朝妻を発した船の主要な目的地の1つが平安京・鳥羽離宮であり、その過程で大津を経由する (fig 1)。14世紀に「石山寺縁起」に描かれた大津やその周辺の船は、全て単材刳舟であり、当時の琵琶湖で主体的な船であったことが分かる (fig7)。しかし単材刳舟は多くの場合、①船幅が常滑大甕より小さく、②舷側が小さいため、重心の高い常滑大甕が転覆する危険性が高い。この問題は、複材刳舟であれば解決することができるが、船幅を確保するためには大木の利用が必須となり、生産性が非常に悪くなる。

(2) 主体は準構造船か

「遊行縁起」には船首・胴部・船尾が別材で造られた船が描かれている (fig8)。これが上記の3部材で造られたものであれば複材刳舟だが、人物2名が横並びに座ることができており、大型化のため構造が進歩した準構造船（オモキ造り）の可能性も指摘される（大津市歴史博物館 1993）。

よって以下では、準構造船におけるモデルを検討する。

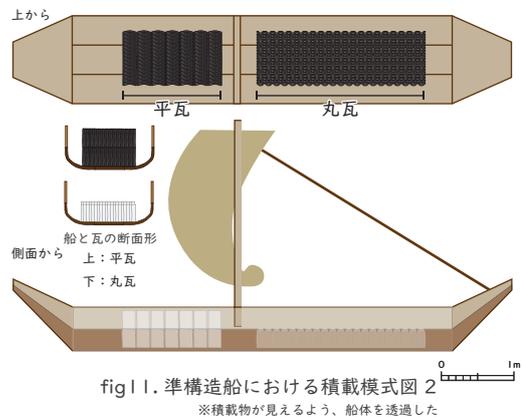
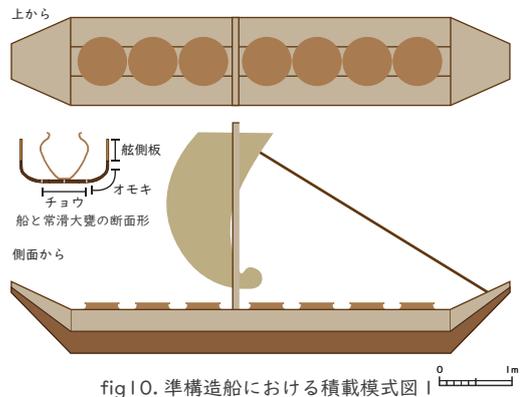
■主な参考文献

・大津市歴史博物館 1993 『琵琶湖の船－丸木舟から蒸気船へ－』・小松茂美編 1988 『石山寺縁起』『日本の絵巻 16』中央公論社・愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』
 ・長島尚道編 2012 『真光寺蔵「遊行縁起」絵で見る－遊行上人伝－』真光寺・中川永・大西遼 2021 『「朝妻沖湖底遺跡」の調査成果と基礎的検討』『人間文化 50』滋賀県立大学人間文化学部
 ・名古屋大学教育委員会 2021 『H-G-8 号 埋蔵文化財調査報告書 88』『名古屋大学文化財調査報告書 105』・中川永・石田雄士・森田通 2023 『「朝妻沖湖底遺跡」の調査成果と基礎的検討 2』『人間文化 55』滋賀県立大学人間文化学部
 ・大西遼・本山伸彦 2024 『考古資料に対する 3D 技術の活用を探る－より正確に、より分かりやすく』『令和 6 年度考古学フェア あいちの考古学 2024 発表資料集』愛知県埋蔵文化財センター

5. 準構造船における積載モデル

2名が横並びで座れる規模とするため、胴を幅 40 cm 弱の部材（オモキ）と、底板材（チョウ）で構成し、舷側板を取り付けた (fig10)。この積載量は、「遊行縁起」では 14 名以上が乗船しており (fig8)、1 名 50kg の時、700 kg の過重に耐えることが分かる。fig10 の模式図では仮にコンテナ 7 基＝約 500kg であり、問題なく運行できる。

瓦は「石山寺縁起」から、3×1 間の門に用いる枚数を丸瓦 410 枚前後、平瓦 525 枚前後と推定した。この近似値となるよう瓦を船に載せていくと fig11 の例ができ、丸瓦 420 枚、平瓦 546 枚の積載と仮定した重量は、672kg + 1,528.8kg = 2,200.8kg となる。かなりの荷重だが、三隻に分割すれば、問題なく運送することができる。



6. 準構造船を利用した際の積載量

以上の検討から、仮にコンテナ 7 基で運送した際の積載量は、下記の通り推定できる。これは生産地・消費地共に大量出土する山茶碗の様相とも整合的ではないだろうか。

< バランス良く詰めた場合 >

…碗 574 点、小碗 315 点、片口鉢 70 点、常滑大甕 7 点

< 鉢主体で詰めた場合 >

…碗 231 点、小碗 147 点、片口鉢 147 点、常滑大甕 7 点

< 碗主体で詰めた場合 >

…碗 1,071 点、小碗 133 点、片口鉢 21 点、常滑大甕 7 点

令和7年度 考古学フェア あいちの考古学 2025

シンポジウム「名古屋城の御庭～下御深井御庭と二之丸庭園～」

会場 金山南ビル 11階 名古屋都市センター ホール
開催期日 令和7年11月24日(月・休)
講演時間 午後1時～午後4時(開場午後0時30分)
定員 150名(先着順) 入場無料・予約不要

11月24日
(月・休)

講演 「絵図と発掘から名古屋城二之丸庭園を考える」
講師 丸山 宏 (名城大学名誉教授)

定員 150名
(先着順)
入場無料 予約不要

シンポジウム

名古屋城の御庭～下御深井御庭と二之丸庭園～

パネラー：丸山 宏 (名城大学名誉教授)

報告1「名城公園遺跡と下御深井御庭」永井邦仁 (愛知県埋蔵文化財センター)

報告2「文献資料からみた下御深井御庭の利用」堀内亮介 (名古屋城調査研究センター)

報告3「発掘調査成果からみた名古屋城二之丸」高橋圭也 (名古屋城調査研究センター)

報告4「水琴窟の音響く武家屋敷の庭園」武部真木 (愛知県埋蔵文化財センター)

司会：永井邦仁 (愛知県埋蔵文化財センター)

お問合せ先



公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

Tel. 0567-67-4163 Fax. 0567-67-3054

<http://www.maibun.com/>





公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

Aichi Prefectural Center for Archeological Operations



埋蔵文化財ってご存知ですか？

土の中に埋もれた土器や石器など、大昔の人たちが使った遺物を埋蔵文化財と呼んでいます。遺跡から出土するこれらの埋蔵文化財は、それぞれの地域や日本の歴史を明らかにしていくうえで、欠くことのできない資料となっています。



縄文土器出土状況【設楽町 西地東地遺跡】 縄文時代



縄文土器【設楽町 西地東地遺跡】 縄文時代



清洲城の石垣【清須市 清洲城下町遺跡出土】 戦国時代



井戸【豊田市 郷上遺跡出土】 近世



石鏃【一宮市 佐法寺野田遺跡出土】 弥生時代



ガラス製勾玉【東海市 烏帽子遺跡出土】 古墳時代

愛知県下で発掘調査や文化財の活用を行っています

愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県下の埋蔵文化財の調査研究、保護、記録および活用に関する業務を行っています。国や県の開発事業に伴い、埋蔵文化財が消失する前に発掘調査を実施し、公共の財産である埋蔵文化財の記録保存と、その成果を活用し、現地説明会や歴史講座などを開催し、埋蔵文化財の普及啓発活動を行っています。また、博物館等の教育施設と共催して展示会等を行ない、地域社会へ貢献しています。



愛知県埋蔵文化財センター/愛知県埋蔵文化財センター=埋蔵文化財センター
YAYOI
 モダンデザイン
 -ニッポンの美、ここに始まる-
 YAYOI: The Advent of Japanese Aesthetics

2020年
 10月10日(土)~12月18日(日)
 愛知県埋蔵文化財センター 設楽町 西地東地遺跡

YAYOI委員会(この秋、あいちの秋を彩る！) /
 愛知県埋蔵文化財センター /
 愛知県埋蔵文化財センター



他分野への情報提供など、より詳しい歴史の解明へ貢献しています

当センターの活動を通じ、埋蔵文化財からわかる土地の履歴を明らかにしていくこと、地域の歴史を解明すること、考古学をはじめ歴史学や地理学、環境学など様々な分野に情報を提供することで、質の高い教育の提供に貢献しています。



令和7年度考古学フェア『あいちの考古学2025』

発表資料集 WEB版

発行 2026年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター